山途旅譚

卷之壹

TALL TREE
LIBRARY
Japanese
Maps
1790
1-20

II 2490

松清

西遊旅譚序

余嘗遊於伊豆浴乎熱海而登于日金山山上有小山曰圓山前抱天城之峻後負函開之巖右富嶽之饅二左巨島之圍二俯察衆山之峙巍周覽羣嶼之崒屼立觀十邦坐辨八極實東海之絶勝也而天下之奇觀也乃探篋裝操筆硯將畧圖真形以示於同好及臨紙顦

筆若存若亡無由下毫於是釋筆喟然嘆曰吁嗟聞之古者善畫有舍筆松豈不信然哉頃間友生江漢司馬氏齎其所著西遊旅譚諗余題其篇端開卷閱之則遊乎西邦之記也其所經過名都樂國神宇梵屋靡不采覽異言殊辭童謠歌謳靡不畢載間之以圖畫以便其觀覽曰試案其目金山圖崎嶇嵯峩堂

泱鬱紆髣髴若視其處恍惚若在其所復亦嘆曰寫真之妙一至於斯乎余雖未西遊也覽其所已觀而信其所未遊昔者有為齊王畫者王問曰畫孰甒難甒易曰犬馬甒難鬼魅甒易犬馬旦暮在人之前不可類之故難鬼魅無形無形者不見故易司馬氏是舉也演風俗之美惡圖地形之險易皆考實按形之

事也豈特犬馬之難哉若夫使斯文遺
輶軒之使以為奏籍亦必為洽見之奇
書不刋之碩記也曰以是為序云

寛政甲寅五月戊申

福山　太田方撰

西趣松洲翁

引き其志を授け性尤も剛直生業営両
趣蒲団敷地三畝歩を以て与ふ其功見
るべし
是を標して名其志曰ふ小冊子を以て
匆々書而已詳記お其志を将来に伝
覩やふの

吾人作而輯之名曰西遊稿乃猶未問和余
笑之曰自山川之未奇歟以至於事實何
之奚奇不奇關係豈乃無境
奇不奇關係事雖奇我心冷關亦雖非
滄桑之雖變之三之雖甚變之奚我心之

是や仏天を許詢まま玄奘三蔵を昌ふ法侶まで
而見て般若智燈照深の法を妙を庸行を伐
善滅獨まま施修芳名無量を随向和光の備
め世を度脱生死林木繁栄恵喜之雑
也然要点あり先心猿不老不死不

以生住之法運于海內普度其神妙不可
言而為不信者所為難也果非陳江陰
真未善

寛政甲寅春日

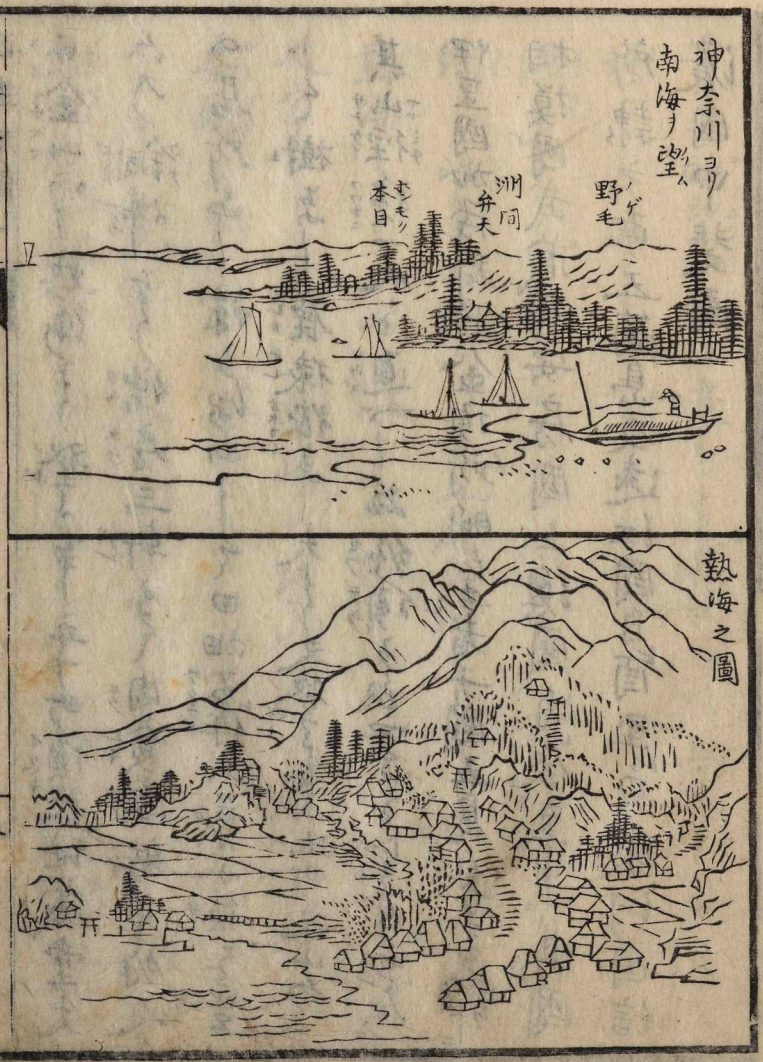
木村 神吉永撰

西遊旅譚巻之一

天明戊申の四月廿三日芝門を發して神奈川乃驛ふるき青木町と云ふ右の方山に登る熊野權現の宮又飯綱社と云ふ夫より田畑をうるく一本松とて小さき松を見る下ハ南蒼海をのぞむ海中に洲と云ふ乃天女の社と云ふ其向ふハ野毛。本目。十二天の森をうる東乃方筑波山西の方富嶽に對ふ甚の絶景なり

小田原乃驛より右の方へ入豆州熱海へ七里みふ

山中ハ大ナル方ハ海也大島初多クシテ景佳此山中大石多
石ヲ切出ス土肥又真鶴石トモ云 近年伊豆御影石ヲモ出ス
土肥村ヨリ四夫ノ家ニテ酒食ヲ商フ 扨ヲ下リ熱海ニ至ル本陣今井
半太夫方ヘ揚ル園中ヨリ温泉涌出ス 昼夜ニ六度
甚熱湯ニシテ浴スルニ堪ス此一村悉ク温泉ヲ湧ク
海中ニモ湧出ル所アリ夫ヨリ七八町東ノ方山路ヲ
テ伊豆権現ノ社ヲ般若院ト云 其山下ノ崖ノ邊ニ飛
泉ヲ引テ浴湯也 病ヲ治スル効験アリ 土俗云鍾乳
ヲ採テ家ヲ作ルヲ俗ニ是ヲ称シテ権現ノ湯ト云


神奈川ヨリ
南海ヲ望ム
野毛
洲干弁天
ホンモク本目
熟海之圖

日金山ヨリ熱海ヘ登ル事五十町頂ニ地蔵堂又
六ノ銅佛ヲ安ス僧房三軒アリ肉食妻帯ノ俗人
ノ居所ナリ一珠ヲ除ノ外ハ田畑ヲ作リ兎小笹ヲ生
ジテ樹ナシ鹿猿狼多シ夫ヨリ又登ル事五町丸山アリ
其山徑狹ク一人ヲ通ズ此頂ヨリ四方ヲ望ム者
伊豆國加茂郡日金頂ニ所ニ眺望ス者十國五島自子至卯ニ
相摸國武藏国安房國上總國自辰至申ニ其國
所隷之南五箇島及遠江國自酉至亥駿河国信
濃國甲斐國

實に眺望四維小達をそるの絶景を画にも
託をいふも経営甚うし
温泉より西南の方来乃社あり大貴已命を祠る
絶て此辺大楠あり十五圍の樹をそる
熱海より三島は還道の方へ越ること五里にう山中にして
人家うし二里ふか登峠の地名あること堂宇肉食
妻娵其弟屋に老婆一人そる白髪を乱火を焚てう
う修ふ貌真よ寒うし然として人語の卿音うき深山
幽谷も事同人もそ行ふべ夫より山をくだりて軽井沢うそ

所々に村(ムラ)人家(ジンカ)又ビン澤(サハ)平井邑(ムラ)等(ナド)あり
三島(ミシマ)迄(マデ)来(キ)る此山中(サンチウ)より天麻(テンマ)天南星(テンナンセウ)を
五里(ゴリ)九山路(ヤマヂ)第(カヤ)一(ハジ)にて大(オホ)あり始(ハジ)て箱根山(ハコネヤマ)を高山(カウザン)と
伊豆(イヅ)天城山(アマギヤマ)五里(ゴリ)十里(ジフリ)之(ノ)余(アマリ)も大木多(オホキオホ)く熊住(クマスム)
又々(マタマタ)佳景(カケイ)(ヨキケシキ)なり

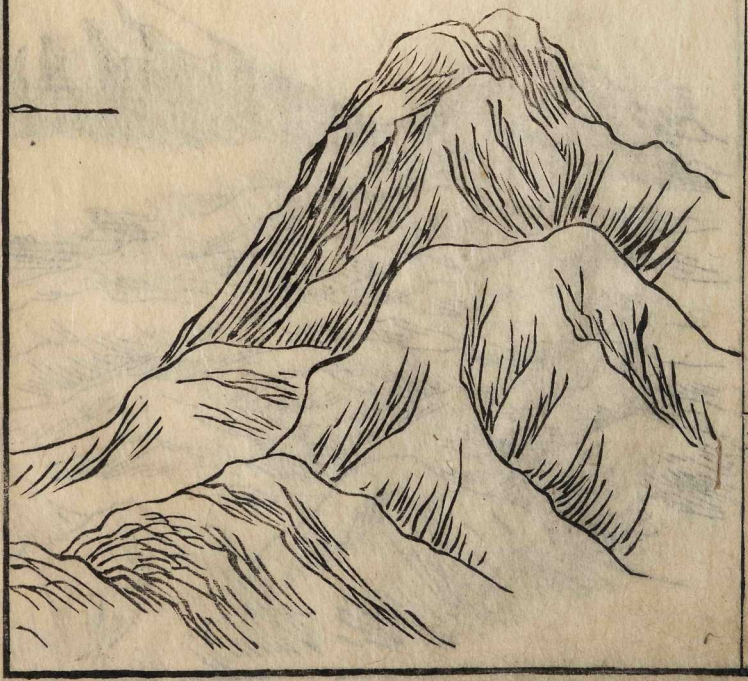
熱海(アタミ)より日金地蔵堂(ヒガネヂザウダウ)
まての(ノ)ぼり(ボ)凡(オヨソ)五十町(ゴジフチヤウ)あり
サイノ河原(カハラ)のごとし
仰て富士山(フジヤマ)をのぞむ時に
五月(ゴガツ)七日(ナヌカ)絶頂積雪(ゼツチヤウセキセツ)銀(ギン)

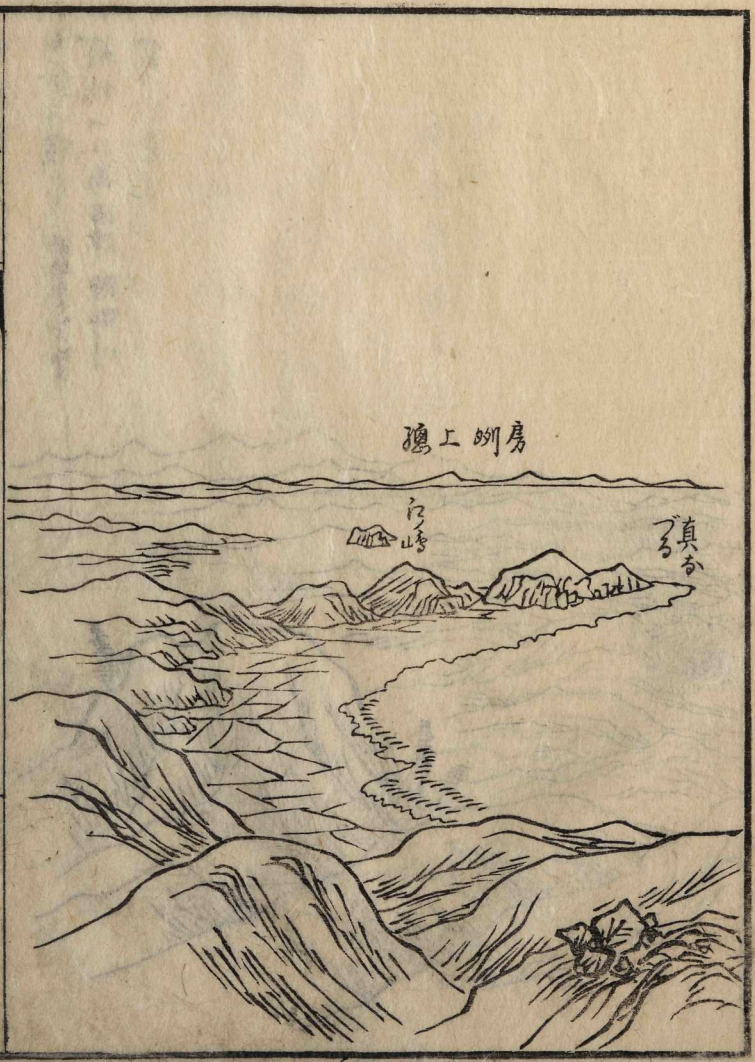
六角九堂ハ地蔵文六ノ
生像ニシテ銅佛ナリ
ナリナリ等全ハ修善寺

日金山頂ヘ九山より南乃
方をのぞ
右ハ熱海(アタミ)網代(アジロ)下田(シモダ)海上
大島 新島 三宅島(ミヤケジマ)見
ゆる

日金山頂より
北の方を望む
富士山左ハ足高
山右ハ二子山

日金山頂より
東の方を望




房州上鷹
江島
真名つる

日金山頂より西の方を望
箱根山三島沼津狩野川
富士川見ゆ

三龍

江尻の駅より一里餘右の方山中に庵原(イハラ)と云ふ庵原河流れ来る出る其河源をさかのぼれば北瀧(キタタキ)と名飛泉(ナダレ)あり岩石(カンセキ)を廻(メグ)り流れ激し甚(ハナハ)だ人物吟杉布(タフ)を苧(キヌ)太布ハ科(シナ)ノ木ニテ製ス此一村紙を漉(スキ)て産業(サンゲフ)とす

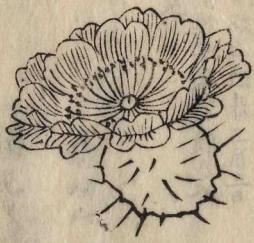
庵原深山の婦女

駿府町数九十八町有咯板至作御城ハ往来の右にあり
四面山続く氣候不順夏月忽変じて冷まじきあり
土俗曰富士山ゟ冷際ゟ風を吹下すゆへ又夏月
雪ハ降風蘭石解水仙自山谷に生ず阿部川茶木地塗
油蒔画ノ器物色〻多し浅間の祠山上あり下り路めぐ阿部川をわたる
府中ゟ東の方三里久能山あり海を臨て山俄に
峻二十七曲斜に登右に五重ノ塔唐銅の鳥居
入ゟ西面本社右に経蔵堂御廟八頂あり此山を
下りて一里餘行て八部ゟ赤十二景あり 往来ヨリ海ノ方一里餘江尻ヨリ入ル

久缽山之圖

覇王樹花（サボテンノハナ）

花ノ色カバ黄



同全圖

久能寺觀音山ヨリ富嶽ノ望圖

昔雪舟遊于支那而所
圖富嶽景何乎望無知
者余登於駿陽矢部補
陀洛山上始觀之
寛政己酉春三月三旨
寫於平安客館乃入
天覽

八部龍王華寺ノ園中ニ大ナル鐵覇王樹基大樹ホ
ソヨロ
ソヒ立ツ花ヲ結ブヿ稀ナリ久能山ニアラズ別テ江尻海ヘ
石路ヲノゾンデ観音堂ヲ望ム眺望スル眼下ニ清水湊
人家千餘軒ソノ流レ出ル巽海中三穂ノ松原富
ニ富士ヲ望ム大難坂薩埵峠由井沖津江尻清見寺
山左ニ足高山ヲ按ジ箱根山二子山伊豆鶴巻山鷲頭山
天城山見ヘテ日本第一ノ風景ナリ

遠州掛川ノ驛ヨリ北ヘ山ヲ行二里小夜ノ中山ヲ越ヘ川ノ渡リ
又ソレヨリ二里川ヲ越テ森宿ヘ富商アリ茶師多シ夫ヨリ吉田ヘ三里

一瀬といふ所より此方川を越す事四十八瀬といふ是より橋
まで三里と橋のまに瑞雲坂をのぼり瑞雲寺と云よりの
小天龍川舟渡掛川を入て山吹大木多く松杉のおひ
山尤高禁ぜり山に登ること五十町唐銅の鳥居に額金明
嶺。山門に最勝閣本堂に大登山と云堂ハ南面本尊観
音を安置ス鎮守南向権現の社ある寺を禅宗秋葉
と云是より三河國鳳来寺にも詣也則寺の後の方坂
をのぼる事五十町戸倉といふ所ある山坂を半里ばかり
犀河舟渡天龍川の源也此邊絶べく来りて芋稈を

食を海辺にて求むるに甚の深山にて様猪多し
夫より石ころ一里無村、二里此間深き山林幽寂人烟寂
寞としてものすごき地なり婦人ハ旅客の荷物を負て價を
取男といへども海を見ず平地と人家の並びたるを
やうやう海無村といふ一里半加宇連峠にのぼる又行一里
半巣山村此所生姜轉ずる峠あり遠州と三河の境の峠
を越或ハ四十四曲坂をくだり大野まで一里半此方真の深山也
大野ハ市街商家多し夫より板敷川を渡川の底岩
如板故の名と称す鳳来寺楽より五十町山にのぼる

行者越ゆ而一町余登るに巌石を攀て絶頂に到る
遠州海遥にそて山を連て峙のみ〳〵そそて三四町山を
下て石階の上に権現の祠を設け不動堂弁天堂
堂の後ふもと左右方岩にそひて塔を夫より石階を下る
事九町半に十二坊天台真言二派を擁頭天台ハ
松高院等言に醫王院の二坊也即ち角石町旅籠
多し〳〵そそ〳〵澁川へ出る渓の水を流る川も舟そ
つる銭亀村を経川をわたりて新城へ二里富商多し
夫より野田へ二里十六町大木村へ三里豊川をわたりそて小

熊村
此邊農夫ハ舍を山の半に作り猪猿多くして作物をあらすゆへ畑を廻りに垣をもつて圖る夫れゆへ猪番小屋ありて日暮ると此熊村の處々に番をすへ松明をつけて猪追ふ事夏日ハ晝もする故也

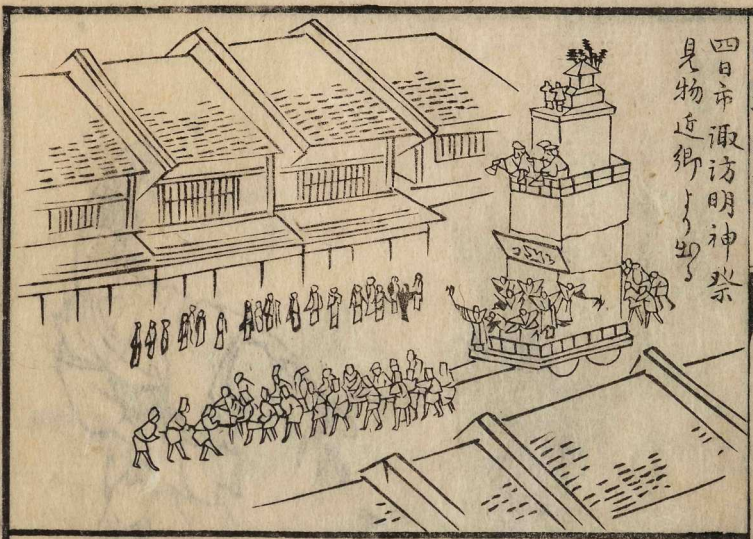
京高戸ゟ京家野ヶ原を野くまをとをり杉原をゆく事一里余御油迄壹ヶ所

鳳來寺ノ方里山
かぐらなぐし

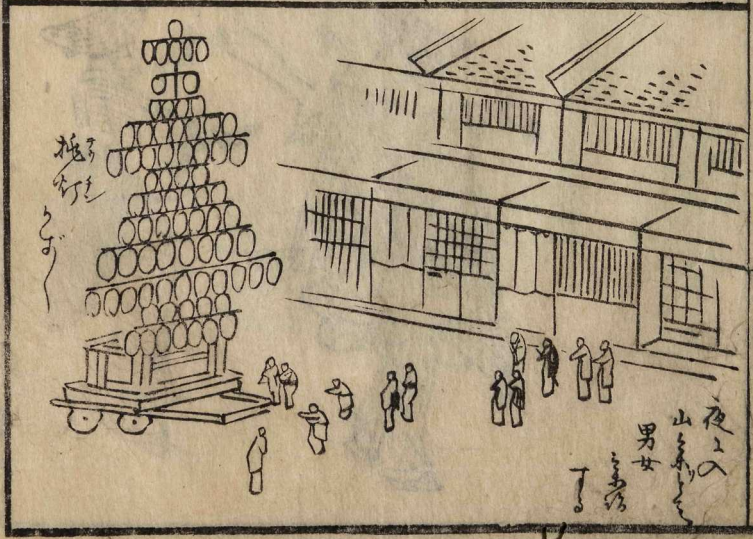
勢州日永村ツンツク踊之圖

おらが茶屋の茶も
名所の山
酒よりもしぶい泉酒
ハアヨイヤサ
馬でやろうか
山伏よ
車でやろうか
テテテツクツク〳〵西の山〳〵
あときりもなしに行こうる
〳〵あときりもなしよ
そこにさしてチヨイみさして
美顔小女郎よそうろう頼い
嬉しやでヱイトコ〳〵

四日市盆踊
おんど唄(うた)
文句
うる



四日市諏訪明神祭
見物近郷より出る



夜に入
男女

勢州四日市の驛より桑名の宿日永村より七
月十三日十四日十五日盆中ニツヽ踊ると小童或十七八の女子
又廿歳ぐらゐのわかき白きさらしを手拭をほゝかぶり
腰に扇をさしまねくを引輪となり唱哥一村二町
より出踊を見ると一町ゝ唱文句ちがひめ
七月十六日日永よりひろき三里余萩野といふる土方
庄一萬石の領地の陣屋を市中一二町夫より東北方
十余町ゆきて河原をつゝら五六十間常は水無川
なれど源は二里も隔湯の山青瀧と名瀑布有

廿日湯山より萩野まで二里餘一里程の原を小笹おほし白真桔梗女郎花など秋の風情あり真溪河岐流れ山中に入時砂山ばかり流て山骨を顯し大石道路を塞又ひき半里溪流を水平岩石をもとして生石頭を踏越踏越し溪流基深く又ひき四五町ほど溪水を高く踏越し左右悉大山ばかりにて谷をさかのぼる山を挽て坂を屋舍を作り十軒許其半ば湯屋にて温泉水のみ大き焚湯にて浴する者多し此絶嶮嵯峨たる大材木五穀不生此土にて時々石ばかり大石の破てかゝるなり

湯の山路溪河乃圖

湯の山全圖

此草葉ゑぐことうまし名を岩石傍に生ず大きさ圖

此山中夏月氣虫を不生(イキスンシ)牧(カ)ず三月に雪消(ユキキエ)て後(スヘ)ぐ一ぱいに近江國(ヒ)野(ノ)へ山越(ヤコエ)四里餘(バカリモツトモジン)が人家を谷流(タニガハ)をこのみ六瀬(ロクセ)川(カハ)ゑ鮭(サケ)多(オヽ)し

七月廿六日廿七日廿四日市取(スハ)訪

明神の祭(マツリ)近鄉(キンガウ)の者見物に出る山車(ダシ)

熱州石巣明より四里
山中に入石太神ごゝ
数丈に直立して
白石なり

石を沸
入る景風
岩なり

十八九町ばかり間
西岩絶壁白岩ニ
シテ紅楓多シ秋ハ
紅葉シテ画ノ如シ

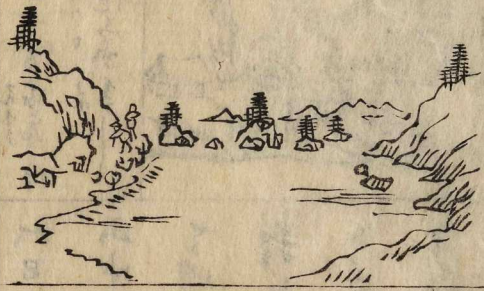
作又称する此驛より京に属す東方の風俗
婦人皆眉を剃り鉄漿を染め京の流行の
髪形を学ぶ社に詣る婦女
頭を巾を以て被蓋月ハ絽を以て
裳を用ハ綿を以て
葉名なり此邑家作多し

八月二日雨を侵して神戸(カンベ)に至(イタル)る三日に神戸を出(イヅ)る白子観音堂(伊勢乃国宮道也)を夫(ソレ)より津(ツ)なる藤堂侯(三十万石)の城下(ジヤウカ)を経(ヒヨリ)て松坂(マツザカ)に町続(マチツヾ)く富商(フシヤウ)を雲(クモ)の如く舟(フネ)渡(ワタ)して伊賀山(イガヤマ)より流(ナガ)るゝ夫(ソレ)より又(マタ)二瀬(フタセ)ある峯(ミネ)を越(コ)ゆ人家(ジンカ)つゞきも富商(フシヤウ)多(オホ)し夫(ソレ)より一里四里小畑(ヲハタ)又新茶(シンチヤ)などいふ所を過(スギ)て宮川(ミヤガハ)の舟渡(フナワタシ)しを越(コ)て山田(ヤマダ)人家(ジンカ)建続(タテツヾキ)繁昌(ハンジヤウ)

の地と外宮内宮の古事中
ノ地なれども町家多し

六日曇ル浦ノ方。山田を發して
山中に入ること半里許にして
川ありて橋今川といふ毎に
程ありて二見ヶ浦といふ
の浦をめぐりゆくに
皆ひとつ村ニ入川あり
毎に和ぐる山をこえて
又渚に出る地の浦なれ
ども松山

にへ志摩手國鳥羽浦といふ人家多く市街(イチマチ)なり
是より四里ゝ半町一里ゝ入浦と西國の方乃船を掛(カケ)
關東(クワントウ)の方へ渡(ワタル)る日和山(ヒヨリノヤマ)登(ノボ)れば四方乃島々(シマ〴〵)まで景色(ケイシキ)也



池の浦ゝ國
城ある島七ツ峙
つゞきあれ方
ゝ

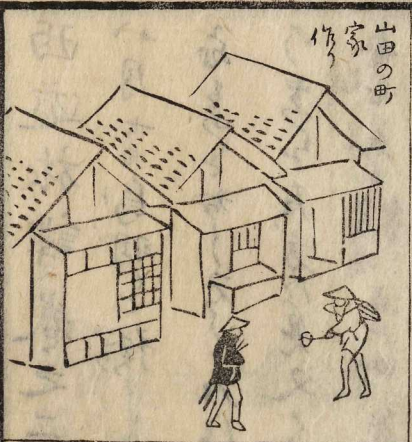
鳥羽
日和
山ゝ
小の方
島數
つゞき
景地

西遊旅譚 巻之二

八月七日鳥羽(トバ)を發(ハツ)して舟(フネ)にて島(シマ)の方(カタ)を渡(ワタ)る風景(フウケイ)佳(カ)なり

所多(トコロオホ)く布引(ヌノビキ)の松(マツ)左(ヒダリ)に朝熊(アサマ)山(ヤマ)を望(ノゾ)む麓(フモト)より二里(リ)二見(フタミ)の浦(ウラ)を右方(ミギカタ)に見(ミ)又(マタ)一里(リ)ばかりにて三軒家(サンゲンヤ)と云(イフ)に舟(フネ)を繋(ツナ)ぐ茶所酒食(チヤドコロサケメシ)あり五六町(チヤウ)行(ユク)て川(カハ)崎(サキ)ありまた一里(リ)則(スナハチ)宮河(ミヤガハ)を渡(ワタ)る又(マタ)少(スコシ)行(ユク)て一里(リ)ばかりにて山田(ヤマダ)川崎(カハサキ)乃浦(ノウラ)の浦(ウラ)より蒿(カヤ)を刈(カリ)て屋根(ヤネ)を葺(フク)

八月九日江州(ゴウシウ)土山(ツチヤマ)の驛(エキ)より京(キヤウ)へ入(イル)山中(サンチウ)小川(コガハ)を越(コユ)る事二度又(マタ)て大河(タイガ)二瀬(ニセ)を渡(ワタ)る山中(サンチウ)へ入(イル)の頂(イタダキ)を刈井(カリヰ)掛(カケ)



ゝゝ如湖人家行ゝゝ平地ゝゝて田畑のゆきゝゝ
日野にゐこゝゝて数百ゝ家二千餘軒四面山ゝゝゝ
海をゝゝ見かゝゝ藩侯の領地なり
八月十百日野より一里餘山路ゝ入小野村ゝゝる墓の山
林ゝゝて田夫の茅舎をゝゝ
行尉をゐきゐし小童ゝ二三輩
かゝゝに来る餅粽なんど喫んで
出ゝゝ面桑の児ゐゝゝ
傭まで来ゐ五六歳の童ハ裸て

小野村山中の小童
皂角(サイカチ)の木多し
土俗曰
むゝ人魚
の血をぬる
取生ぐる
ものと云
人魚墳
八方うち
文字
あれども
よめず
土民の曰
救世菩薩(グゼ)
墳と云小童石をなげ
うてば鐘のごとくいなと
二尺
六尺余

西ニアリ山林の立籠ハ郷ノ都の人の美服ヲ着シテ弊カラヌヲ見ル所謂ヤウ此一村四十余軒ヲ又四五町許山径ヲ入ル左ノ方ニ四陽の墳アリ故世善達の墳ヲ又人奥ヲ載ル尓ハ蒲生リヲ人奥ヲ葬ル聖徳太子崩御の時ヨリ夫より西ノ方不動堂ヲ堂ヨリ八方の境アリ是人奥墳ヲ日本紀ニ推古帝二十七代四月當ヲ又ソノ二里余石塔村ヲ生村ヲ石垣ヲ飛石又ソノ流ニ投田のアリ家の陽ヲ東ヲ跡ヲ九輪丸石屋根形の如キ石塔の片ヲ彫ル石塔寺ヲ有ル石塔あり石壇一基石塔の左ヲ有ル跡ヲ二十間余ヲ西百歩四

方の平地にて石乃大塔のうしろにも石塔多し

日野より二里余寅の方うら高の川ハ二間程ありて流れくまハ大なる川原なり則角まり是也

日野より二里(丁)許の方石塔寺の大塔の圖

大石を以て作る土台の上に釋尊

入滅一百年の後月氏國阿育王八万四千の

寶塔(オウタフ)を作(イテ)十方世界へ投(ナゲ)遣(ヤリ)し塔

の一ツなりといふ

我朝にも千年を經

たるといふ

總高サ二丈五尺余

文字も

苔蒸崩(コケムシクヅ)れ

石塔寺

創立より此塔をみるといふ

此あたりも山中人家絶(タエ)たる山と一塔を

遠くながめやるこゝち

石塔寺の圖
大塔
此をとの石塔嘉元二年ヲ彫付ゝ
石塔寺本堂是也
石塔ヲ以畳ム

日野ハ加藤侯ノ領地ニシテ此石塔寺ハ仙臺侯八千石ノ領地ノ
夫ヨリ一里ヲヘテ山ノ入月ヲ戴テ草中鈴虫ス〳〵
山〳〵ヲヘテ又〳〵初更ニ日野ヘ帰ル
日野町ヲ過テ綿向ノ社ヲヘテ其境内神輿庫ノ南ニ
封疆ノ裏ノ墳ヲ畫ル圖
延慶 人皇九十四代花園
院ノ年号也寛政三年
庚戌迄五百年ニ當
碑銘圏點ヲ加ヘ字畫者也

跋

二親幽靈無法界
采五成佛得道也
方丈都婆主公者爲
延慶三年十月十六日
願主日記重方

八月十五日石山寺に宿を月湖(ゲッコ)臨て山湖(サンコ)水を繞(メグ)り勢田の橋(セタノハシ)見(ミ)る〻ま(マ)に景(ケイ)也 ウゴイトゝ云魚(ウヲ)鮪(シビ)皆湖中の産(サン)なり

十七日大坂中之島ヲ数日滞留(トヾマル)ス

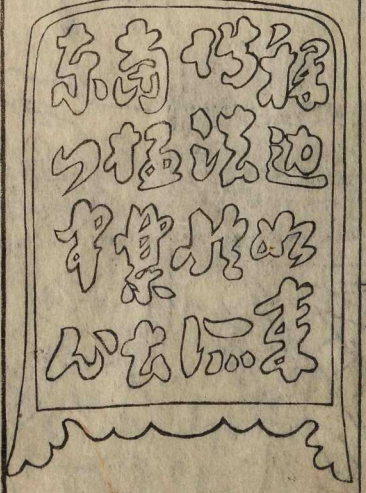
津(ヅ)の祠ヨリ西ノ方ヲ望ム大坂ハ見ル此地ノ絵事(エゴト)ヲ楽(タノ)ム

略ス

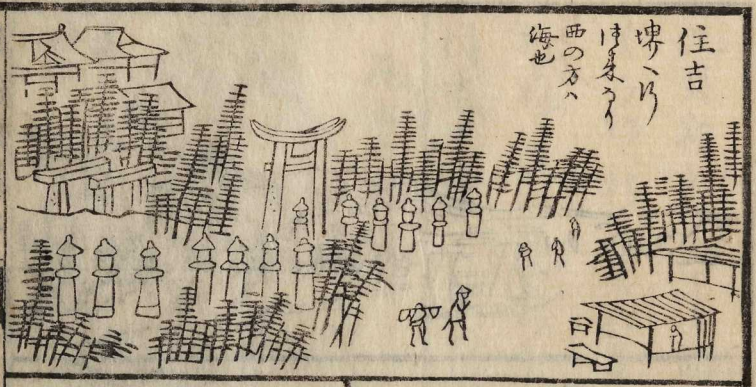
高津の祠ヨリ見ル図

高閣ハ西東ノ本願寺也

芝居川筋
木津川



天王寺石乃多居唐銅の額ハ
小野道風の筆蹟(ヒツセキ)ニて五重の塔
うつし多宝堂多
清水観音ハ高き丘(ヲカ)ニ眺(ノゾ)ム堺筋乃
北畑也瀧(タキ)殿(ドノ)ニて遊亭(ユウテイ)うつし



大坂より船にて渡兵庫を十里摩耶山
下を過て則兵庫に至る市街富商
多く清盛の築島楠正成の塚あり和
田の岬行平の松あり
晩日須磨寺を過て敦盛の石塔を見る

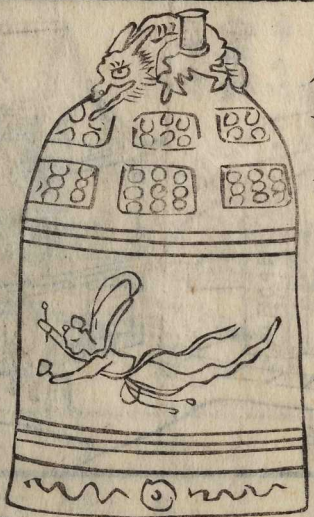
播州
舞子ノ濱

須磨寺
往来より
二三町入

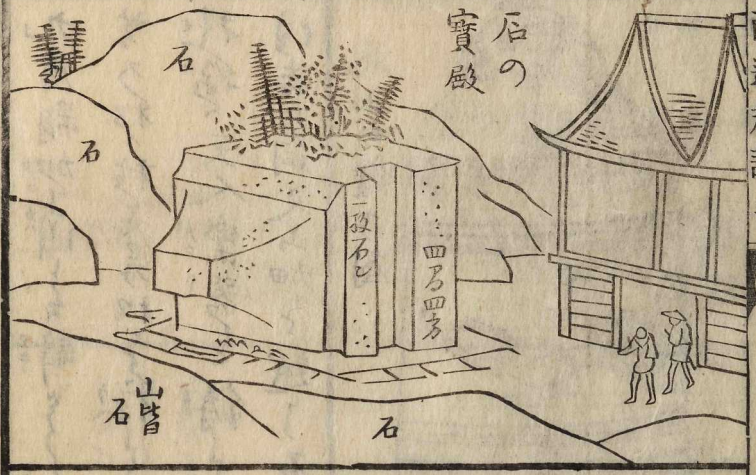
仲哀天皇の陵路傍
にそびえ垂水山の上千
本の松を植つゞけ
舞子濱松優て道中
第一の佳景也より明
石ほど人丸の祠ある門よ
り入石碑を建寛文四
年甲辰明石城主戸向守
源信之と徒

九月朔加茂川を雪駄を左方に入尾上の鐘高雄の松を
芳乃松杜を若松を植ゑ尾上乃鐘支那物とそ
模様へ天人樂器を鋳ゑ
住吉の祠又山畑を越ゑ石乃寶殿を此を大石時山をか
ゑ剣御影石を切出を
勇根の松八天満の祠乃境内を祠大社ゑゑ老松
實に千歳を經る大樹也
夫より豆崎の驛ゑ出ゑ

尾上の鐘乃圖



石の寶殿



曽根の松

甚乃大松ニシテ龍蛇ノ如シ
一方ハ枯ル

市の川を前に見やり姫路の天守見送りつゝ
過ぎ行けば
川一つ二里半島の驛にいたる赤穂三里
山を入（赤穂は往来に
ひらけ南海なり）
城内大石内蔵の屋敷門に三巴の紋を
五日新堀渡りて
岬の松林を社古大松海岸山
を繞り波濤濺ぐ
連て風景佳
なり毎里一渡
三里坂越

ここにある船つき市中人家多し。八日赤穂を發て市街

をすぐ〳〵山路へ入り三里ばかり山林の
しげき狭間其ほか杉竹多きと木
山越ゆる片ほとりに出る即ち海辺なり
備前ほどし印部村焼物を備前焼
かとよく右の方へ入事半里両山
競てそびえる山麓石をつみて穴を上
草木をもて穴庫をつくり此ものの形
を樵者み日をとおへ塚のごとく

仰の時作る小祠あり此山乃北方に二間三間又五六間
方なる塚大石を以て築てあり数多く連なり備前備中
の國内古墳陵の数多く残れるも往古の事なれば伝記なく
此奥十餘町に寺あり観音を安置す麓泉を見大路あり
行くこと四里ばかり岡山の城下市街続て富人多く
京摂に一二町を隔て二ツ無き繁昌の地なり

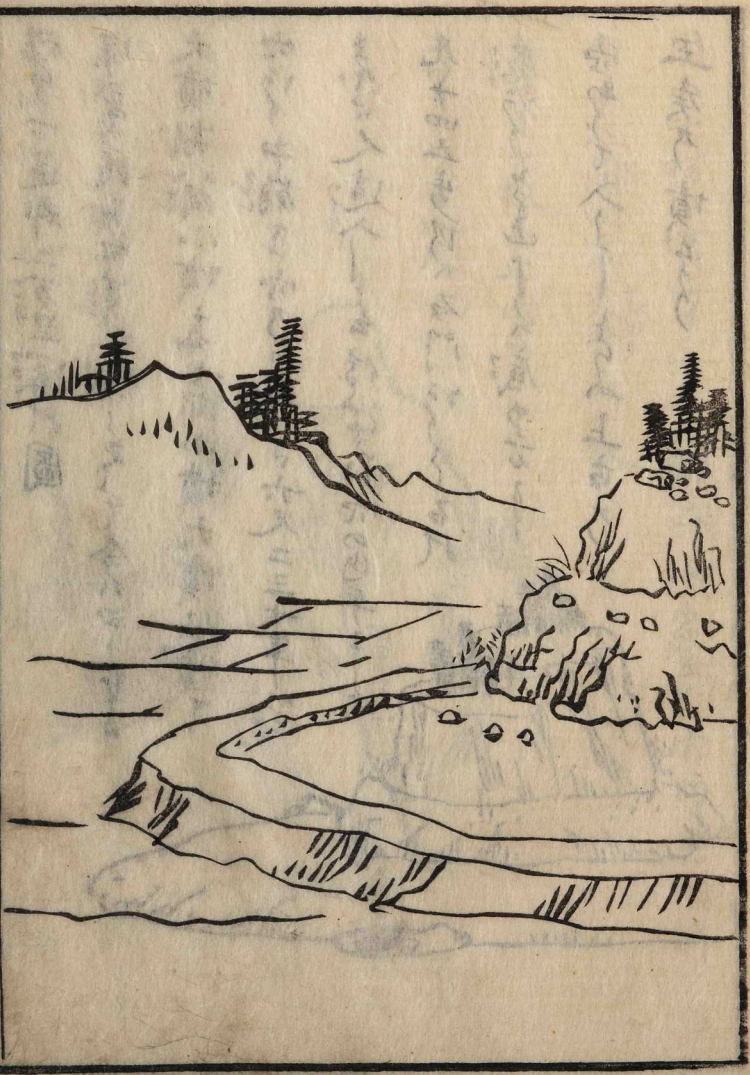
十一日岡山を発てより二里餘の備中の境なる和気郡
小一社の吉備津の祠に詣で初穂銀を納しに火を焼
其筆忽鳴動するの奇也俗にうぶめ奇事あり

祠も多く建つらんと覚しき二里右の方に入足守也木下矣二万五千石の領地にて陣屋を黒宮氏の預りて有古城跡にて径二丁余是は往古足守賀陽郡溝手村賀陽寺の古跡より堀迄を手筈を以て又径尺五六寸余生焼の壺を同賀陽郡巌山下より堀迄の外鬼瓦凡そ二十枚ばかり掘出す処領内柏井と云所

足守より一里半田中丈四方雪の如く積りて黒宮氏発起にて湯治場をもうけ湯治する者多

北もとより五六町をへて中山にいたる山石數十丈
をなして飛泉ありまた鬼城とよぶる石ありて塁のごとくなる
鬼の塁口径八九尺ばかり因幡の方へ十余里鐘乳穴あり
穴中甚廣く鐘乳石多し
備中下道郡南山よりも石古墳あり河邊の驛より十二
三町南へ入墳の高さ七間半許登ること亘六間中
壇廣一間半に周二百四十歩許溝を深さ六七尺堙ふさがりを出
封疆をなすこと六尺許欄周四百歩余所々壷を置その
数千もありしが今は二十許殘りぬ

壷の口径八寸高一尺二寸許圖半に
帶(すび)の素焼(すやき)にして赤色(あかいろ)なり



備中下道郡二万里塚の圖

塚の北の後方右なれ塘となりて今六田となる

大墳離八間小墳高七間小墳大墳に傍て

穴口より北崩て空口廣さ六尺三十年前

まで人這入しと云傳へ穴の内平にて

凡十四五歩ばかり石門ばかり石

扉ばかりを通りて底の方も

空ありて入るしるべ上古の

王侯乃墳なり

同山手村古墳ノ十五六間許山ヲ登(ノボリ)テ穴ノ口二間ホド
ノ内ニ八間四方天井(テンゼウ)石一枚アリ
左右モ一枚石ノ穴中
高サ七八尺

日之ノ國分寺ヘ
五町バカリ

九月十四日足守を發して長田村を窪木村より宗堅寺へ
不入家つゞきの富商もある夫より中原川を渡て岡山へ
至る伊東侯の陣屋を經て矢掛を出る十丁餘り板倉侯
の地人家續き此間吉備公の境ひ夫より神辺今津此
所福山の城見ゆる阿部侯十万石の領地なるべし尾の道
といふ所より市街縦横にして富商多し西より小江戸といふ
藝州侯の領地と此所より船に乗て東風を走
事十八九里夜に入小島にて泊る夜半東風吹て船を
出す明方小島にある船中より西南の方を眺望海波

を艫一島点ぜるぬき艫の方に立て其景を
川ぶ此邊の紅毛油画法をぬぐ家ぶ扣ふ
川ぶ入ぶ猫魚獲ぶ多ぶ島ハ勢州桑の城下市街修繕
則左方ぶ見ぶ右の方ぶ入奥市場ぶ都昌ぶ雑ぶまぶ町ぶ
離て海ぶ出ぶ小島数ぶ点て佳景ぶ一里ぶ草津ぶぬ
ぶ猫ぶぬぶ漁舟ぶ多ぶ宮島ぶ渡海上三里宮島旦七里田
畑ぶ樹ぶ伐ぶ海岸ぶ人家ぶ佰千余軒ぶ市中ぶ鹿ぶ放又
猿ぶ多ぶ宮島ハ平相國清盛の創立也神ぶ多ぶ事ぶ
此日九月十七日大潮満て廻廊ぶ燈火水面ぶ映ぶ

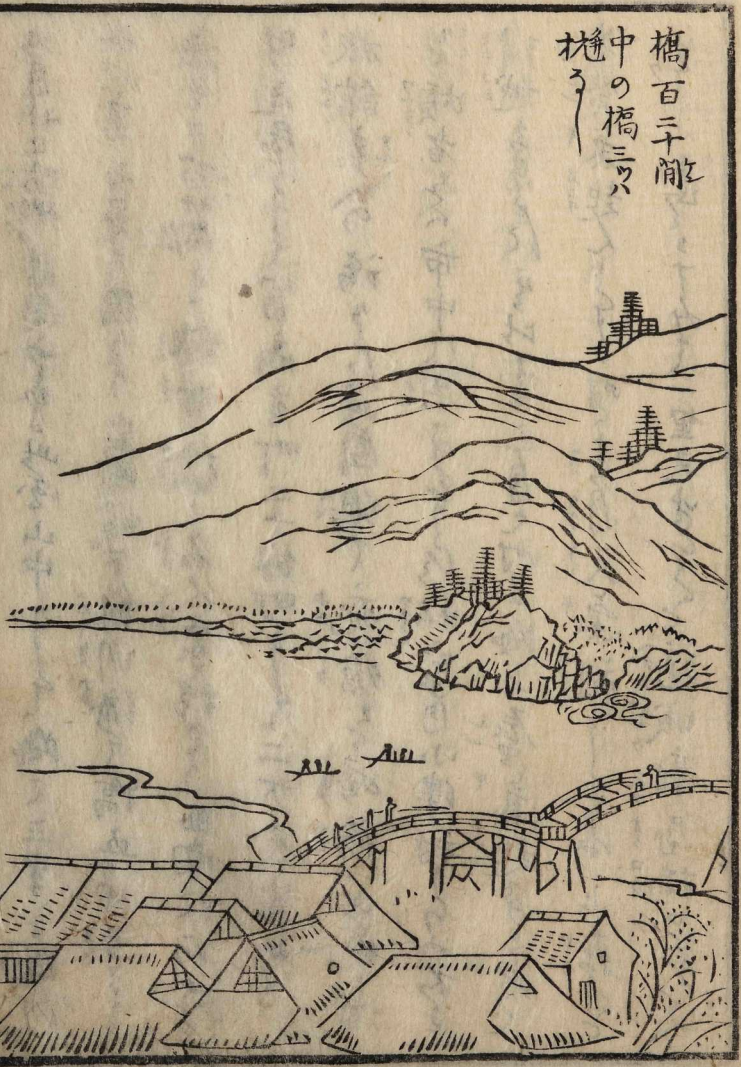
藝州嚴島宮之圖

彌山（ミセン）岳ことに
山上に堂宮多く
未刻（ヒツジノコク）をすぎて
登る事を禁す

左の方千躰堂ひろく堂ふかく
様あり

宮島を少し北の方へ行けば小方(コカタ)といふ湊(ミナト)あり。是より二里関戸(セキド)の驛(エキ)。右の方一里入(イル)防州岩國(ボウシウイハクニ)なり。

岩國錦帯橋(キンタイキヤウ)の圖


橋百三十敵
中の橋三ツハ
拵ふ

九月廿日防州岩國ゟ山中ゟ海へ三里ゟ渡り
小舟方ハ石見乃國ゟ岩國城下錦川流て橋五ツ掛ル
趣き百廿間ゟ錦帯橋ゟ名人家作ゟ西南に行
時ゟ尾ゟて富商者町二十餘町ゟて二万余家あり
旅舘ゟ人の話ゟに此國總て疱瘡を嫌ひ疱瘡
を煩者ゟ市中に居ゟ事ゟ不ゟ私宅へ小津村ゟ不ゟ
一越ゟ事ゟ生ゟ時ゟ三月ゟ時ゟ海上靄氣起ゟ事ゟ
先靄氣起ゟ時ゟ雨天氣ゟ前ゟて海上ゟ勢ゟ
生ゟ嶋ゟ見ゟて一里又ゟ事ゟ陸地ゟ見ゟ

八山上小塔多くハ竹林の釜を頭に直に葺て奢の
高也又色々なる釜ともする事甚だ漢画の如く
或ハ白山上松なと畑の内にある海を望む村なとハ
釜ハ小さく村ごと横に見へ釜斜に此所ハ多く
なり多雪ゆへ屋根をもる 長州の内三万石ハ又瓦多き
上ハ関嶋也和らけ屋多く此所のごとく起し又
此所ハ犬神とて犬神の人まもる物或器物
やしきの妙ものと思ひ起ぶことをみる事也
考ふるに犬神ハ狐ともいふ犬神の香ひ甚て人ふ

ゐるまゝる事ども織物の異ふ
樣ゝなるのうち中に雪をふせぎ
ゐるを名よび熊犬神の者ともて
頭ゝ巻ゐるこゝろ博學多識の人を
吟味もとめ給ふ
岩國より七里繩ヶ原ゝゝ不思山ゝゝ水晶石英
まゝ又生ゐるまゝに地食ゝゝ
枝のゝゝ岩ゝゝ地の嶮なるゝゝ故ゝ名
廿三日朝五時ゝ錦帶橋ゝ渡川ゝゝ

町船にて川を渡る十五六町にて阿品村を夫をはじめ
八九町山の方に入犬戻りといふを山号骨といふ渓水
岩石ゆゑにて名とせしに啄木鳥多く此ころ秋なれば
岩上草木紅葉して実に山水画のごとし一里余
弥山嶽といふ山あり甚だ嶮岨なる石を踏てのぼる
事二十一町余絶頂に堂あり山神を祭るよし
扨山を下りて日暮旅館にいる犬戻右の方山を越
ひだり洞あり鐘乳石あり

犬戻(イヌモトリ)
岩上松を生ず

犬戻

聳ゆる岩の内洞より
此路岩石多く
十間廿間の大石多し

犬戻
此所ハ岩骨多
谷乃流を乱りる

岩の態

九月廿七日岩國を發して山中に入程なく海邊に出大賀岬(オホガサキ)と云
なり向に萩の島八代島杜の島數多見ゆる此邊
蜃樓(シンロウ)多くあらわる漁父(ギョホ)に尋ねるに此日天氣よく
雲霞なくて春三月時のごとく島々空に浮(ウカ)びるがごとく見
えうち招(カタチ)く代島(カスミ)と書(オビ)て霞の中小山の
如きの象(カタチ)あらわるる漁父の曰是則蜃氣樓(シンキロウ)なりと
云てやみぬ秋起(オコ)る事稀(マレ)也按蜃(ハイ)能く気を吐(ハ)
くと云て樓臺(ロウダイ)林木(チクリン)の象(カタチ)を作(ナ)すこれ
いわゆる蜃の気(キ)を吐(ハ)くなり蜃の方言(ソレ)
いわゆる蛟龍(コウリョウ)の属(ヨミ)にて大畠にいる

此路海邊にて島多くみゆ前島つゞき一里大島つゞき
十里小鳥島小黒島小新五郎（是を小呼と）及島の數二百余ありと
渚邊岩石多く風景佳七里ばかり濱也大畠の瀬戸山よりの
ぞむ兩山高くそびえ山間僅三四町ばかりとおぼしき海中岩石ありて
出潮の流急なり夫より山をこえて大畠村にいたる此邊旅客
の通行絶てなきゆえにや旅籠屋一軒もなし柳井津村に宿をとる
廿八日柳井津をいでゝ一里半多武瀬村をすぎ鵜
市といふ人家を經て多く布をさらすをみる國木

山を越て峠 防州長州の境なり室積と云ふ山上なり
ゆゑに佳景也山をめぐりて人家千餘軒あり
乃邊鄙なれども食店なくしてなし松原二里海島田
ゆゑにつゞく一村よりある旅籠なり農夫の舎に宿る
九月廿九日朝雨出立して河をこえて濱を松原をめぐり
半里余皆砂地なり又海岸に大石よりなる或鉛なり
多きを以て通路も悪戸数三百ばかりの濱にて
人家をつゞる毛利侯徳山の領地にて戸石と云に出此所
よりは未だ徳山にあるをも四里福川より吹野二里半

大島の瀬戸

豊後山
室積

富海と宿を定めて發足する事二里半宮市此宿人家
つゞき佐波川を渡り右の方山間へ入數町也毛利侯三十万石乃城下なり
岩淵峠佐野峠を佐野焼と大鉢壷の類を商ふ事七里山中といふ
ほど一宿を山中と云ふ小發して行事二里半二股瀬川
をわたり吉見村新道峠を越すと人家つゞき富商多し
此邊總て家ごとに石炭を焚途中そこら臭く又煙
多く絶ずよりて出る山腰を堀出すなり
扨此事七里長府へ入るまでありとの川蓮臺寺坂
吉田川を岩國より此邊まで皆穀乃村を植つゞく紅黄如花

西遊旅譚 卷之三

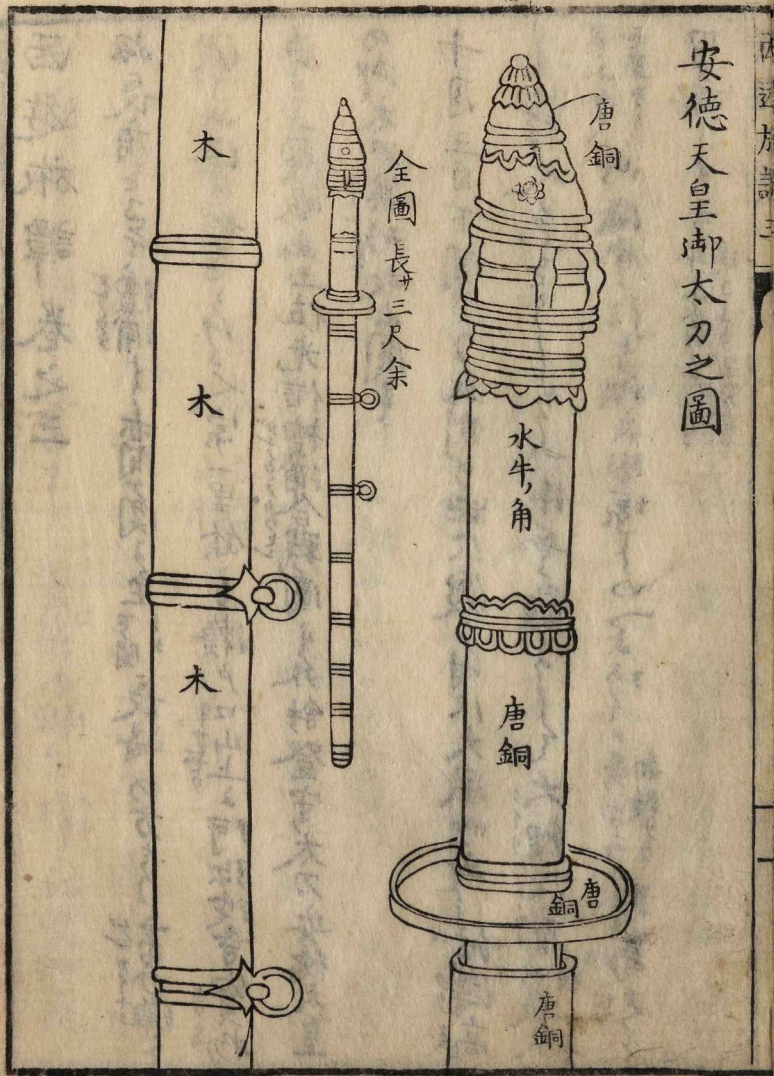
松濤

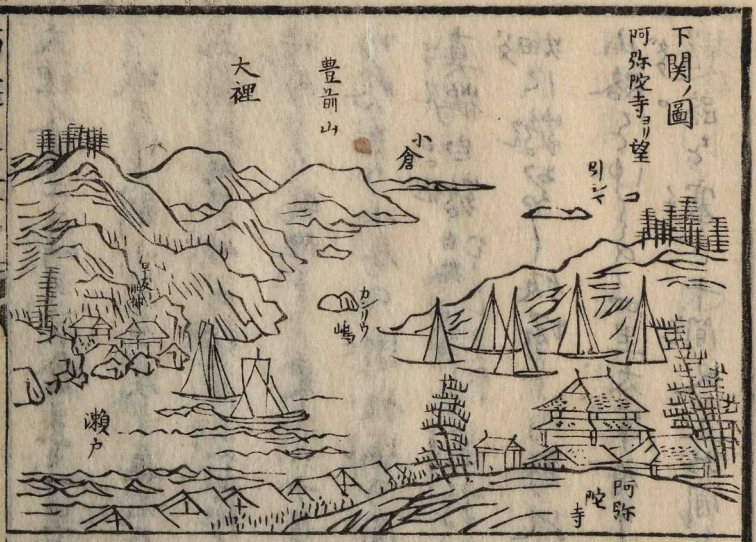
扨長府をうそ檀浦(ダンノウラ)より赤間関(アカマガセキ)へ至(イタル)下関(シモノセキ)長崎(ナガサキ)の方より玄界灘(ゲンカイナダ)を渡(ワタリ)て此港(コノミナト)へ船(フネ)をうかべ人家一里餘(ヨ)を瀬戸口山上(セトノクチヤマノウヘ)へ阿弥陀寺(アミダデラ)寶物(ホウモツ)多(オホシ)一古法眼画(コホウガンガ)土佐光信檀浦合戦図(ダンノウラガッセンノヅ)を永鉄(ナガガネ)登守(ノカミ)太刀安徳天皇(アンドクテンワウ)の御太刀異形(コトニカタチ)故(ユヘ)ゆへ図(ヅ)を

十月三日下関(シモノセキ)より九州の地に渡る時に大風吹出(フキイデ)波濤(ハタウ)高(タカ)く一時人色(ヒトトキヒトノイロ)をうしなふ漸(ヤウヤク)難(ナン)を大裡(タイリ)に着(ツク)此(コヽ)廻(メグリ)大裡一里半小倉(コクラ)へ三里なり此海中にて源兵衛塚(ゲンベヅカ)といふ(ハ)秀吉(ヒデヨシ)の船頭(センドウ)より引島(ヒキシマ)なり

田首(タクビ)とも云平家の一門引退(ヒキノキ)もる集(アツマ)る

安德天皇御太刀之圖




下関ノ圖
阿弥陀寺ヨリ望ノ圖
大裡
豊前山
小倉
瀬戸
阿弥陀寺

下関を船より眺
長州山

大裡人家二三町ゟ小倉まで一里半海を左の方ゟ見ゟ小倉
乃城ゑゐる則小笠原矣十萬石乃城下そ市街縦横ゟる夫ゟ
筥崎地黒崎の驛に名所地ゟ長崎乃方々月ゟ書ゐそ
時雨〳〵風雨多〳〵東方ハ十月の小六月ゟそ東西風至にまゐ
ゐれバゟ小屋の漸飯塚の間五里ゐゟ田邊川至に鶴多〳〵
真鶴白鷺 白鶴ハ全體白し 黒鷺 小ニシテ黒ノ頭赤シ 筑前の地總〳〵平野田
畑に鷺おゐ〳〵飯塚ゟ内野ゟ右の方に入田畑をまぜ〳〵
山路をゆ〳〵の四里太宰府ゟ此路甚乃山中ゐ〳〵大石
道路を塞ぎ十間又ハ五六間ゟるもゐゐゟ天滿宮大ゟ

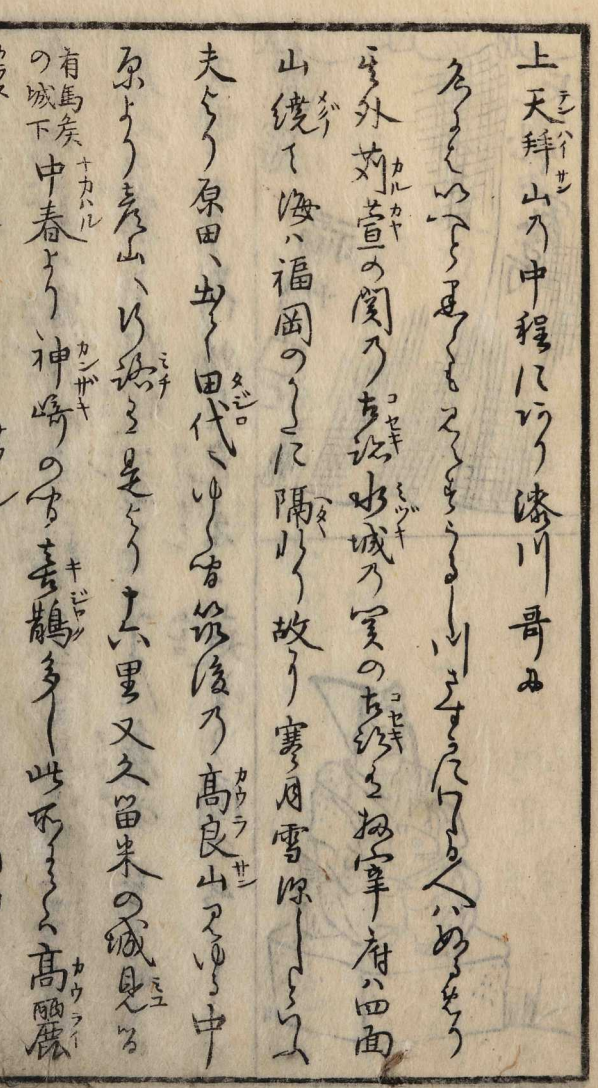
旅舘多シ　門を入て池ある橋三ツ架る　過現未ノ三橋ト云　山門を入て本社左右廻廊にて浜そびる地なり池乃景大楠多し毎年八月廿一日より廿六日まで祭禮（サイレイ）近郷より参詣多し　天原山安樂寺と云　寺ニアラズ地名ナリ　岩踏川社乃北の方三里ゟ在（アリ）思川宰府町西へ流る川也　愛染川（アイ）社ゟ南へ行る川也　此川の末乃方ゟ来る水白川ハ宰府町西南にあり　哥に

むらさきの色ハ浅くも染つらむ　こゝろ乃ふかき　をしの毛衣

観世音寺　清水山普門院　博多（ハカタ）へ行（ユク）　博多ゟ戒壇（カイダン）院観世音寺四里

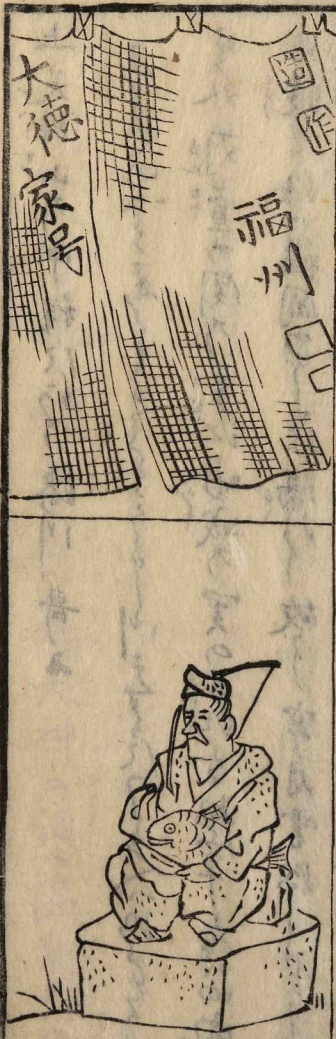
くらゐ近ㇾ都府樓の跡也又安徳天皇乃殿のいらゝ先年
此寺本堂乃下ゟ凡二枚を堀出ゟ生焼ゟゝて赤色伊部
やきのやうゝゝ女人の物ゝゝも是都府乃古瓦ゟゝ菅
丞相乃詠ゐう境見凡色此寺ゟゝ六七町をゐゝ田乃
中に礎ゐゝ方五六尺程乃丸柱の象ゐう綴て此寺
缺凡多ゝ表に三葉ゟゞ裏布目ゐゝ陸奥多賀城の瓦
のゆゝ二日市針ゟゝ山まで見る幸橋のゐう
多ゝまゝゟゝゟゝゟゝゟゝ先年凡ゟゝとゐゝ
四方寺山高橋沼運う城跡ゟゝ天拝天神の祠ハ温泉町の

上天拝山の中程にて漆川哥ゟ



名ゟ見ゆる遠山ハ英彦山ゟ宝満山ゟ
雲外苅萱の関ゟ古跡水城ゟ実の古跡を松掌有ハ四面
山続て海ハ福岡のうしに隔り故ゟ寒月雪原しらく
夫ゟ原田、出ゟ田代ゟ少有筑後ゟ高良山ゟゆる中
原ゟ高山ゟ松ゟ是ゟ六里又久留米の城見ゆる
有馬矣の城下中春ゟ神崎の方ゟ吉鶴多ゟ此所ゟく高瀬
鳥ゟく又此所ゟく索麺ゟ作る作賀鍋島矣の城下城下
町ニ里餘人家ゟく富商ゟく妓人ゟ皆の風

江戸より境原(サカイハラ)まで一銭一文を二枚(ニマイ)
よぶ(ヨブ)ごんご(ゲンゴ)ござる異(コト)なり此所(ここ)まで来て石乃(いしの)ともをた
てる中(ナカバル)にも寒月(カンゲツ)雪を積(ツム)の三尺小田にある此(この)
農人の家ごとに暖廊(ノウレン)をこしらへ麻布(アラヌノ)のやう此(この)
支那(カラ)より荷物を包(ツミキタ)む苴(ムシロ)なり図のやう

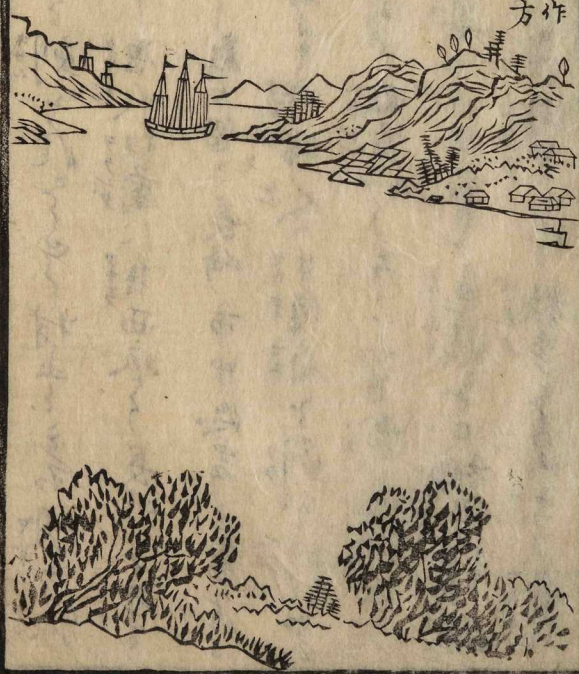


夫より成瀬にもる又塚峠にのぼり絶頂に姥野茶ヲ出ス
より彼木
此峠大山坂にうつり移りて大村にもる十町ほどの右家中好の
半に猶を植ゑるをもれの大村城下人家續く十月九日市
街戸毎に注連を張香を焚啜てうしと問ふ此地疱瘡
をきらふ此節にて國流行をおそれ除んがためと町ぬし
しより舟にて海湾にうつる小島多し景又佳長井にいたる
舟を上陸舟よりうつり事十餘町時津に至る大村ノ領地
ここより
二里鯖腐石通端にて中野村平野村をすぎてその
路常の犬をそだて神にそなふ小童多く筒袖をきる唐人風

鯖腐石 数丈ニ積ル
上の石名ク鯖
土民の曰サバらつる魚を
煮てしゝくさんを製
ゆへ石ノ名ク鯖
久しくくさらざるを
名とす

又石階多ク大石に佛を刻シたるを多く村上に豕胡羊豚
雞を畜フ長崎市中唐人和蘭に售西坂ヲ長崎ヲ見る
坂を下ルに墓多く入リ數を留る長崎市中海岸ヲ家ある
故ニ石階多ク又橋も石ヲ以作婦人の生殖眉ヲ剔ヒ脛に加ル
輪ヲ以ス唐人ノ言ヲ傳ルヲ通事ト云放言ヲ左ニ二ヲ載ル○ハホウ
姉或娘ヲ○ヨカッサン色情ヲ○相思唐韻ニ媚ナリ思
壇石ヲ○キンバ叫ヲ○バセウ游里ヲ○散歩ヲ○スマフリ番捉
ヲ○コシヤウ物ヲ喚ヲ○シケンカアイヲ○コレヲ好ヲ
ヲ○ヤット就又ヲ○チャンヽヽヲ又言の中に○バッテンヽヽヲ

其ほか野菜ハ風土暖にして冬月雪ふれども園中に橙(ダイダイ)柚(ユヅ)
酢(スノ)ニ用ユ 琉球芋(リウキウノイモ)多し 赤白二品有 赤蕪(アカナブラ)の大根ハ辛(ヒジカ)
く ケラノ尾(ケラノヲ)ともいふ



西坂(ニシザカ)より長崎(ナガサキ)を望む 稽作(ケイサク)方(カタ)

支那人館ハ十善寺ト云フ寺ニアラズ地名ナリ中ニ社稷ヲ祭又関帝堂ヲ帝命ヲ奉テ渡海スル者古ハ各氏中ハ王氏今ハ銭氏ノ人来ルヲ初十二家ハカリ是ヲ自ラ一巨ノ交易ニ渡海ヲ以テ蘇州ノ人也則蘇州ハ日本ノ大坂ノ如キ地ニシテ南京第一ノ繁栄ノ所ナリ今ハ七八艘ノミ渡海シテ十三艘ヲ限リ程赤城ト云フ所浙江ノ内乍浦ト云フ所ノ人ト十五年以前ヨリ長崎ニ来ル又方西國ト云者ハ画ヲ以テ来ルノミ年ニ渡海ヲ福建ノ人ナリ王氏周官張宋敬庭ノ類年渡海ス

みづのごとく書畫を作ることをなしてよくこれをなす
草亭撲庵宕山可亭皆書をなす伊孚九山水の畫
いづれも此ころ商賈にして交易の餘暇此技をなす日本にて
商家にても俳諧書畫を學ぶもの多し是又以てのほか
能畫能書或文雅と賞するたぐひなり況南蘋一人
能畫よりて畫師ども又近年なびきする方西園ハ交易に
疎くして畫をなすこと多く水墨よりして着色をなす師也
といふ者周西山名ハ選此一人ハ此京の産にして遊歷して南
京へ渡る頃長崎へ來る此者一人ハ文雅の者にして能書畫

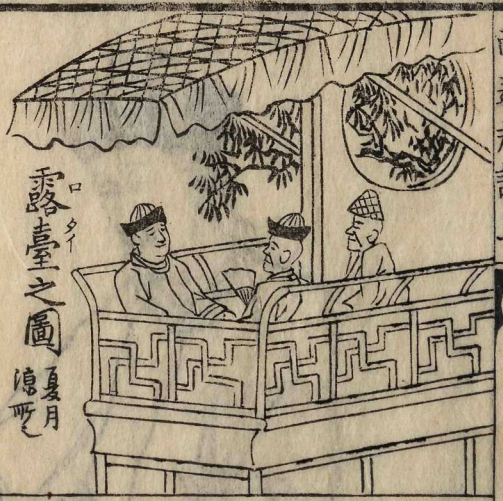
をとゝし百日をすぐして帰帆を官に避来るもの南京寺或悟真寺に寓して書畫を見る又此方ともも画など賣る總て支那人は日本人ようり事をよく志るゆゑ価もやゝ昂又顔面日本人のやう只衣裳のみそう

支那人之圖

明亡今より清の代となる乾隆五十三年也風俗如圖頭ハメリヤスニテ中ニ髪ヲ置

下人

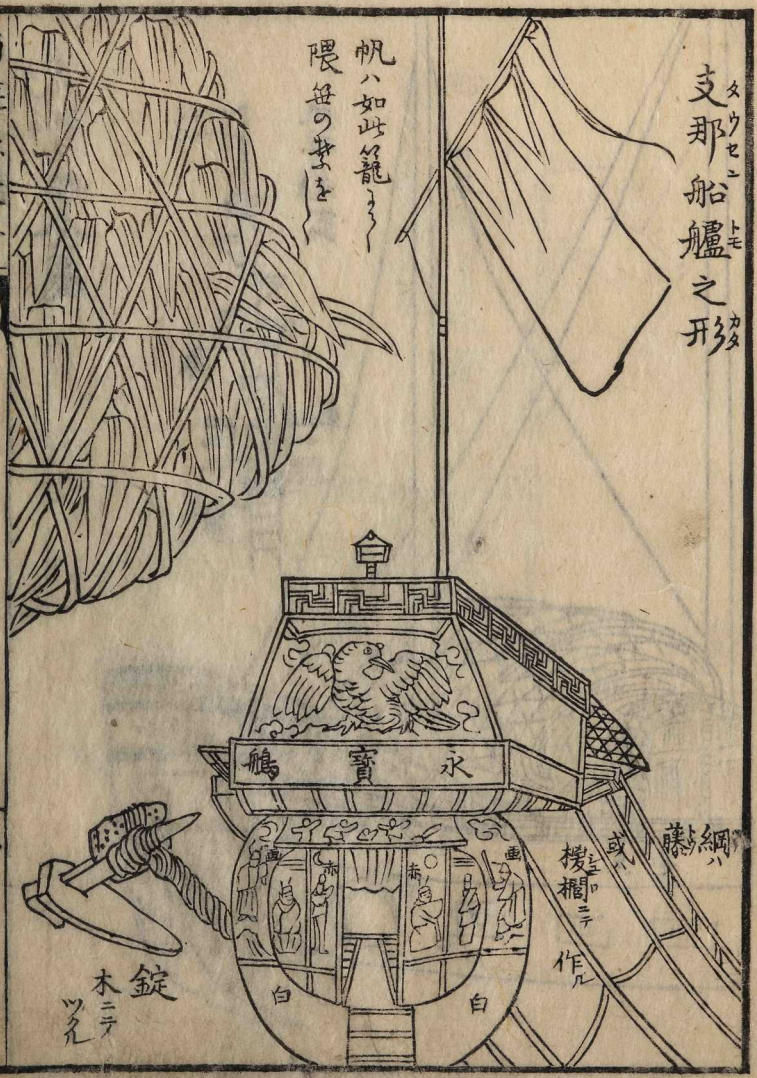
乾隆帝（ケンリウテイ）天下を巡狩（ジユンシユ）する事四度歳九十餘



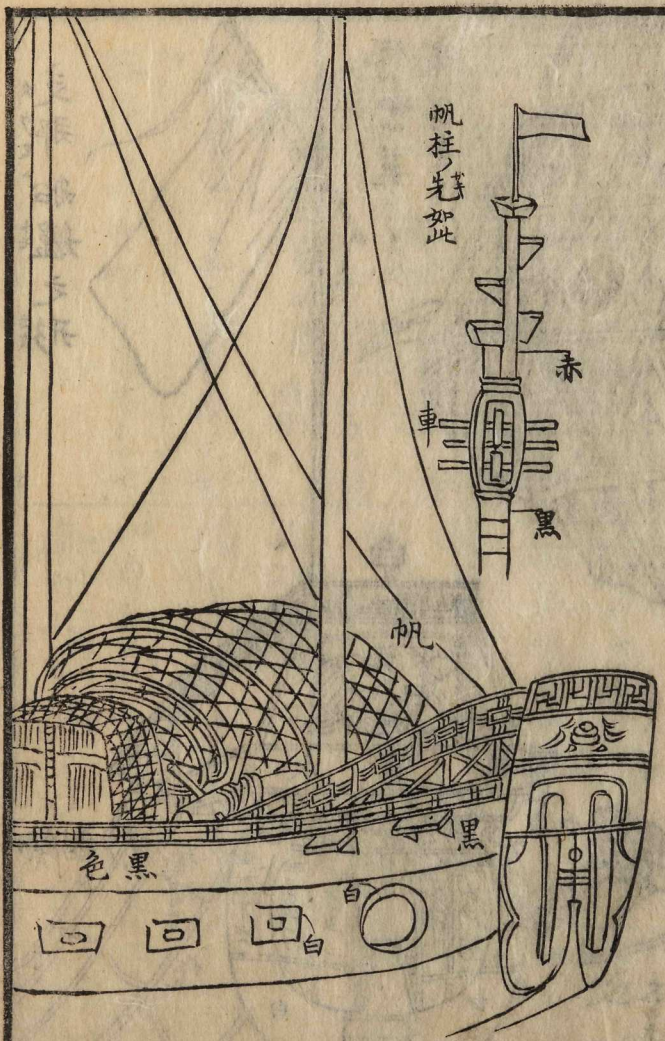
露臺之圖 夏月涼所

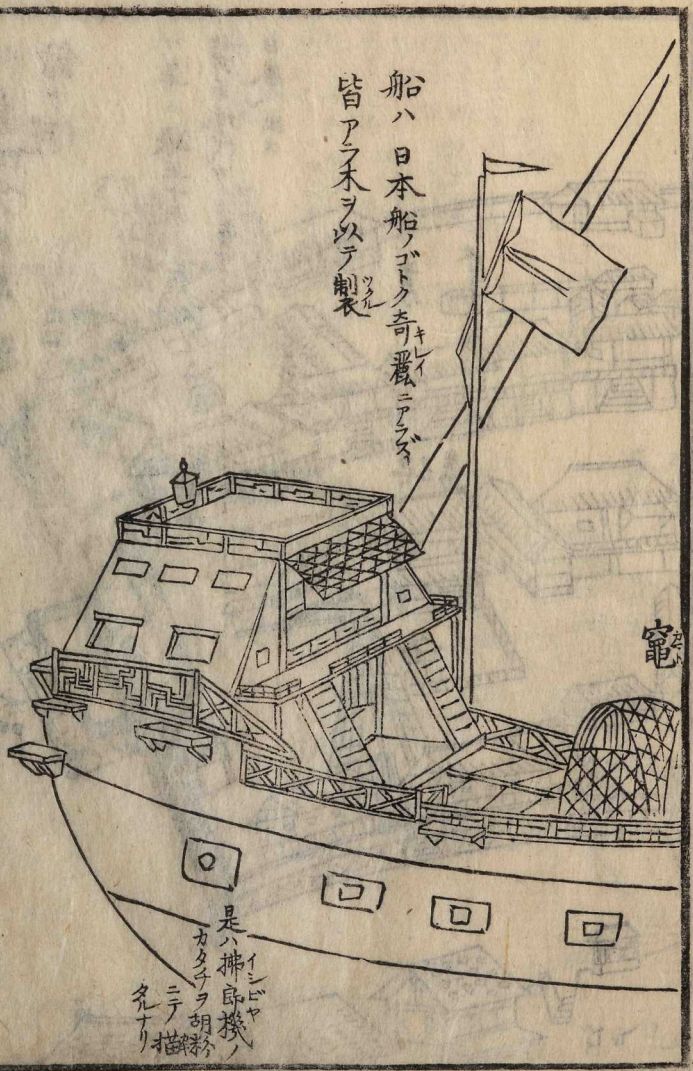
支那人居宅ハ日本ノ家ヲ作リ方ニ
カルヽヲ作ルヲ一日本ノ吹
客ヲヨロコバシムル吹毛穴ヲ設ケ

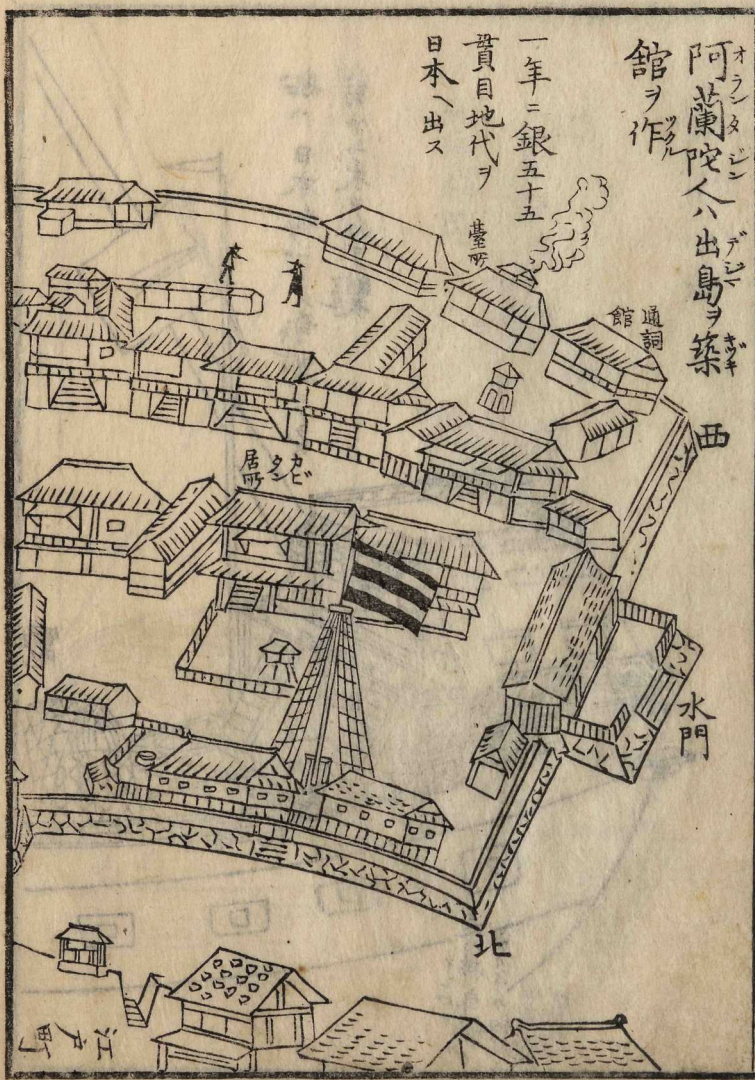
支那船ハ梅ケ崎ニ泊スルヲ以テ船ノ
大サヲ十五六間帆ハ布ニテ製ス
藤ヲ以テ籠ヲ造リ内ヲ隈
笹ノ葉ヲ布錠ヲ木ヲ以テ
製艫ノ方人物或ハ鸛ノ類
ヲ彫緑ヲ施シ彩画事甚
備リ雲ヲ黒塗ニシテ
四角ナル形ヲ白ク画是ハ狒狒
機ノ形ヲ画ニカキタルモノ

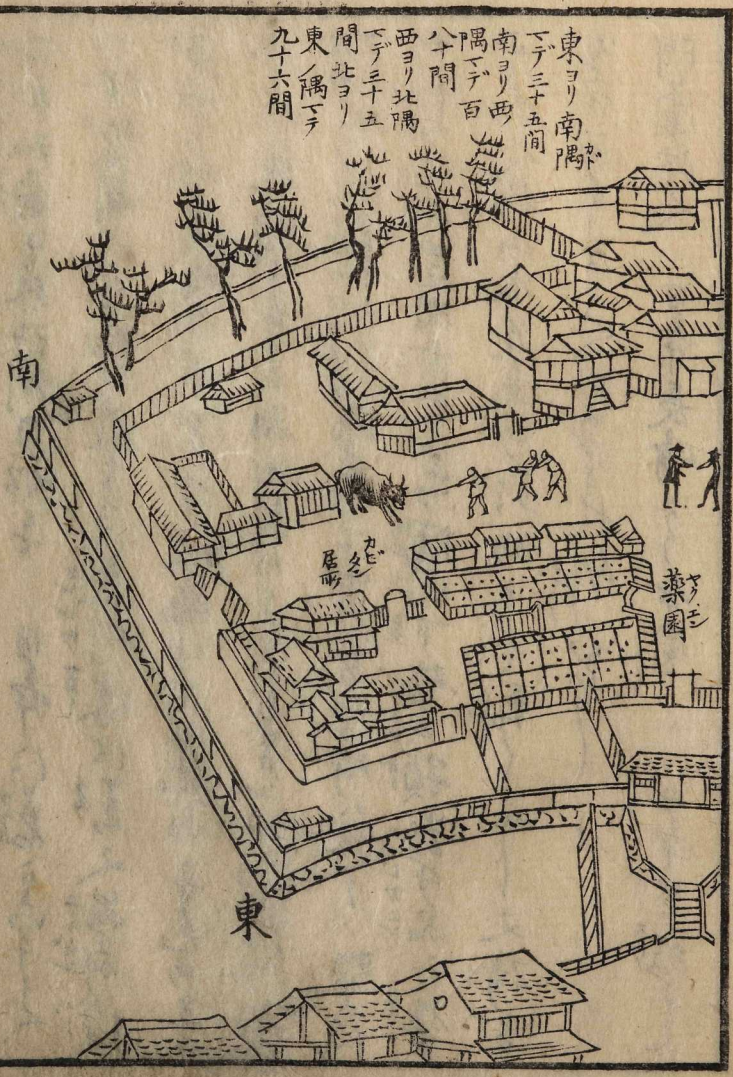

支那船艫之形
帆ハ如此籠ノ隙毎ノ葉ヲ
永寶鵬
綱ハ縣ル
或ハ櫓ニテ作ル
錠木ニテツクル
白
白

支那船全圖




船ハ日本船ノゴトク奇麗(キレイ)ニアラズ
皆アラ木ヲ以テ製(ツクル)
窗(マド)
是ハ排(イシビヤ)筏ノカタチヲ胡粉(ゴフン)ニテ描(カク)ナリ


阿蘭陀人ハ出島ヲ築キ館ヲ作ル
一年ニ銀五十五貫目地代ヲ日本ヘ出ス
臺所
通詞館
カピタン居所
西
水門
北


東ヨリ南隅マデ三十五間
南ヨリ西隅マデ百八十間
西ヨリ北隅マデ三十五間
北ヨリ東ノ隅マデ九十六間
南
東
カビノ居所
ヤクエン
藥園

支那和蘭を乗せし船を 日本にては
ハ伊勢國の大湊なり泉州堺にては又紀州博
多あるゝも肥州平戸に渡海して寛永辛巳の年
今の長崎にうつる扨出島のうちカピタン
波國ヨリプホウトヽ云
居所二ケ所にて一ケ所ハ外より
て少し樓上四五間方なり欄間下硝子額數千品を掲
て画人物山水花鳥の類ひ動くが如く又椅子
をうごかすやうにつくりなせり卿おのれ
阿蘭陀人 日本長崎より本國まで 日本里數

一萬三千里ゝゝさしわたし二千四五百里ばかりず此 日本よりハ西に當り少よりも多し故に暑月おゐて米を生ぜず パンまたハ或牛肉をもて食とし故に印度亜洲の船を免じ交易をゆるす第一の國勢とす○イスパンヤ○フランス○イギリス○アルマゼ○ホウレン○モスコビヤ○リユスもろもろ此所にて交易す○ヲランダ此洲と遊ゝ交易す此洲をつゞまりを濱半と称する國なり 余り暑き地方 崑崙奴ハ皆黒人なり 彼國の婦人ハスワルトヨンゴゝゝ多ジヤガタラ女人なり ジヤガタラハ赤道直下の国 皆黒人なり 阿蘭陀人の下奴となり来る者皆黒人なり

ゐるといへども黒き物にめうじて又黒うげるもあり夏月ハ躶(ハダカ)まとなり袈裟(ケサ)のみをもつて纏(マト)ふまゝベンガラ縞(ジマ)うり冬月ハ和蘭(オランダ)うり衣服をうるこれい紅(オラン)毛(ジ)の衣服のごとく羅紗(ラシャ)毛布(サラサ)まで作る頭巾(キン)あり

世界クロンボウさまざまの是をうり

シタロスこのものゐうこんを船中の水(カコ)をもつてもみ洗ふまゝ

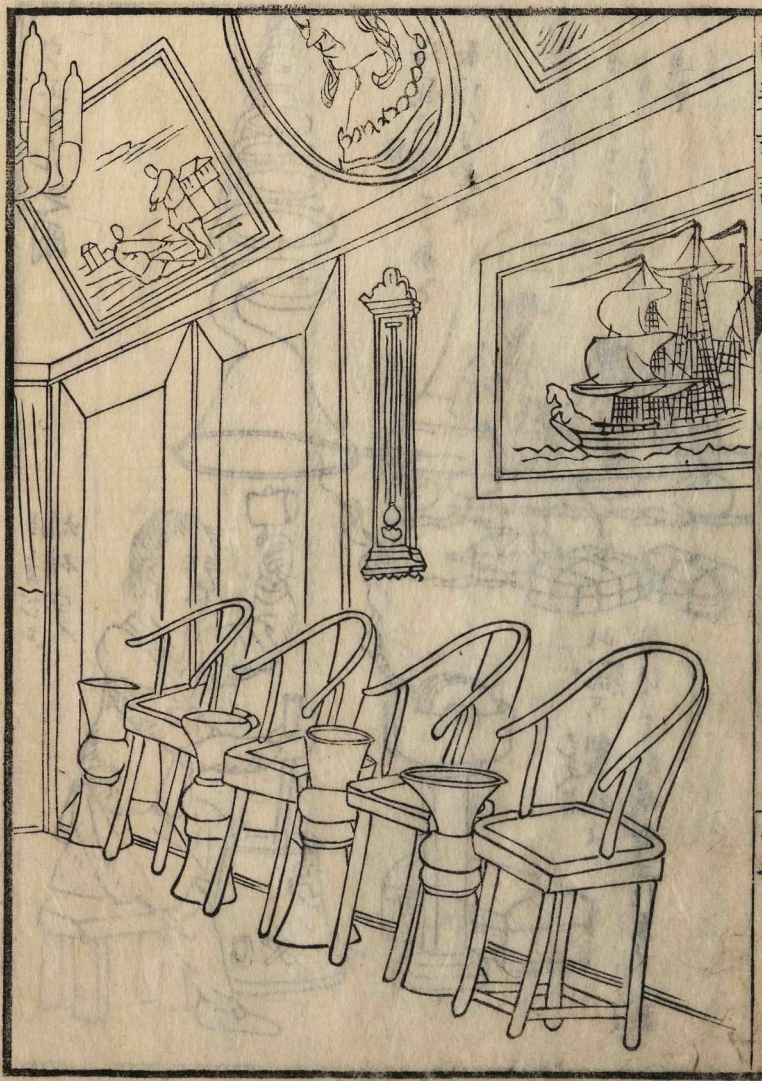
船の中みな〳〵紅となる　中綿(ワタニ)をよくすることあれハ　白ボウになる也(ナリ)　此もの阿蘭陀本國の人〳〵言語も和蘭の辞(コトバ)をうり顔色(ガンショク)ハ白く髪(カミ)ハ栗色目ハ瞳(ヒトミ)青く一丈六尺のもの

散髪衣服阿蘭陀乃ゑ一此マタロス帆そ〳〵らにのぶそ
身よかろう事多ごそ〳〵
和蘭船そ天サ四十間表乃方狭ハをそる絢〳〵チヤン峯ニ
〳〵そ高一艦のうち家形作内へ入時玻璃障る前り
天幕をそう地毯天毯をも半に楫を廻ら車そ
そのたゝり小童そそも帆そう三所へ建そごそ〳〵
下り入神島機千五百石に行う朝暮一日充そ
又十二三もそるの事叶う是そ松事にそるの事ら
波國風そう船そ〳〵〳〵そ〳〵そ〳〵そ〳〵そ〳〵そ〳〵
又洋中へ出そ

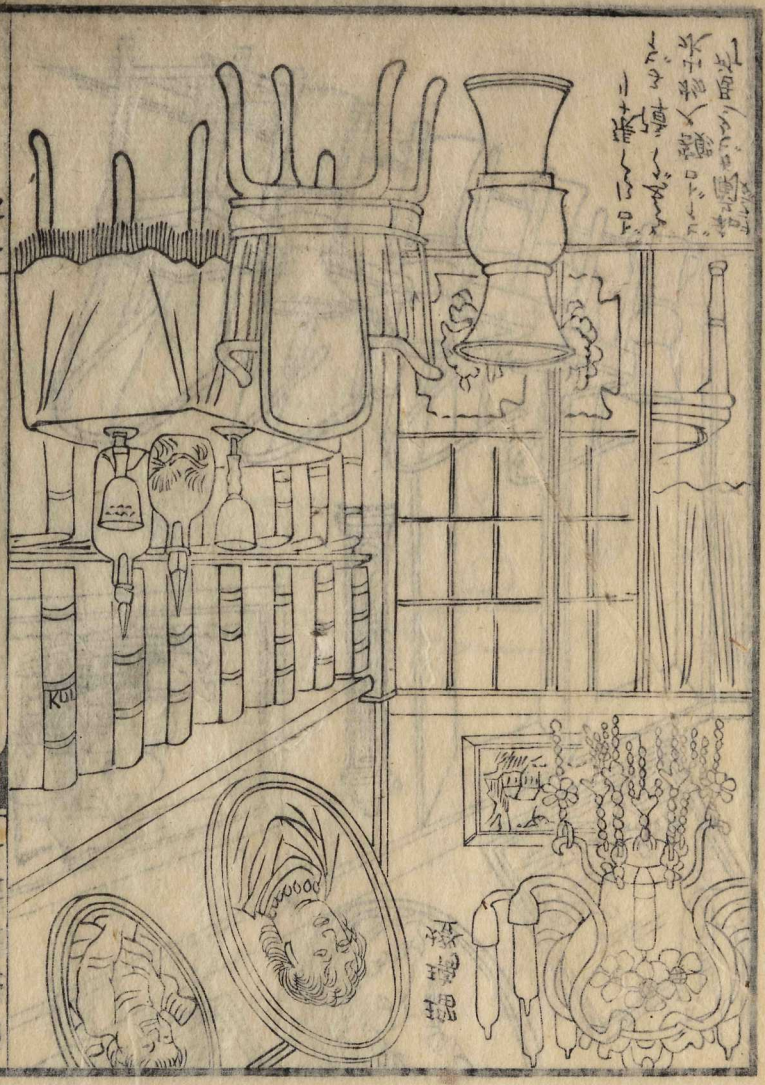
要害にそなへ事まことに厳(おごそか)しく穢(けがら)はしき物を禁(いまし)めて婦人(おんな)の事もまた此國にて火をともし浄(きよめ)ることを音山(ひびき)に響(ひゞき)くが如く霹靂(へきれき)のごとく荷物と船の底の積(つみ)竈(かまど)をおかしうそうじて垢(よごれ)を去所(さるところ)をすてに入船(にゅうせん)の物を貯(たくわ)へ置(おく)べき場(ば)を掃(はら)ひ船とともに浄(きよ)まるのねがひをぐんとつとめ寿命(じゅみょう)を減(へら)し又燈(ともしび)を消(けす)火もおろそかにせざるを通(つう)じ礼(れい)あり故(ゆえ)にウヨンドルと云(いう)奥(おく)を繋(つな)ぐ事を通(つう)じ支那(から)の船の粗(あら)きを阿蘭船(おらんだぶね)の精(くわ)しき甚(はなはだ)よろしとなり

ウエントル之圖

海底に沉(シヅ)めて
取(トリ)り上(アゲ)る所
是をウエントルと
名(ナヅ)く
此器(キ)の製(コシラヘ)
用ひ和蘭奇工に
多く載(ノス)
鹽硝守人(シヤウバンシ)



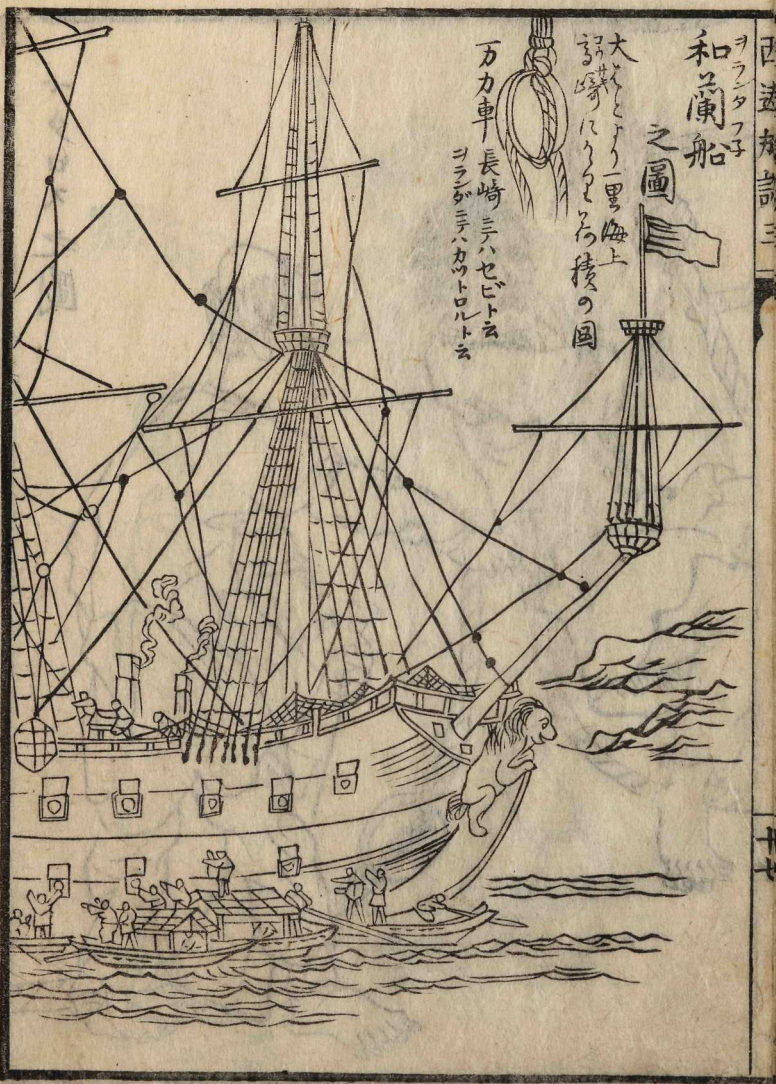
瑠璃燈
オランダ和蘭カピタン居所
ビイドロ窓人物山水
を多く障子ビイ
ドロにて張れり

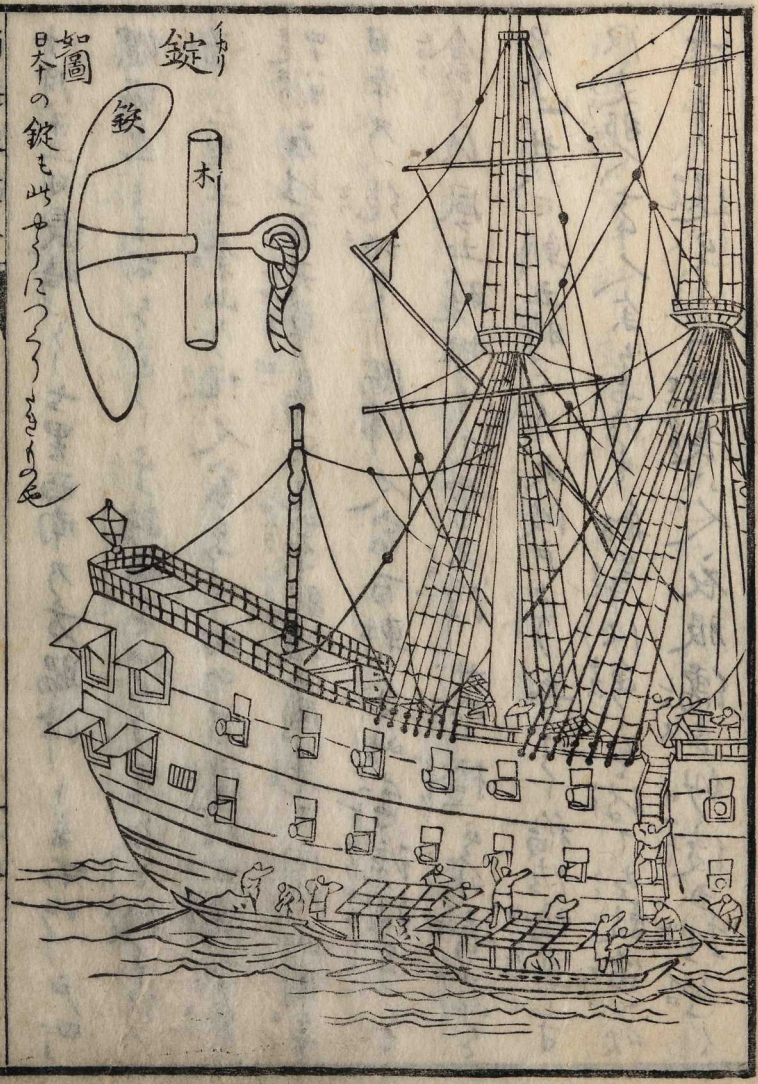


崑崙奴（クロンボウ）スワルトヨシゴ之圖

夏月ハ躄（ゲジ）ク〻ハめ圖

ヘタロス之圖


ヲランタフ子
和蘭船
之圖
大なるとより一里海上
望ミ見ゆるとの説の圖
万力車 長崎ニテハセビトヽ云
ヲランダニテハカヽトロレトヽ云


イカリ
錠
鉄
木
如圖
日本の錠も此やうにてつくりまうけ

十月十二日長崎より七里西南の方脇津といふ所に戸町
深堀などいふ所をすぎて多以山をめぐり岩石を踏こえ
凡二里半余山の頂へ人家あり右の方遥に五島を見
日足より四十八里左の方天草島又島原肥後の國見て向所此國多
日本乃絶地なり脇津人家百軒余此地琉球等を
食とし風土暖地なりて雪不降サボン橙多く育草を
そだつ廿八日朝五時より大波戸より舟にて稲佐悟真寺
に支那人十人余乗舟岸に着て寺数箇所を
遊覧す彩色の彫刻の彩色

黒き衣下人八鼠色木綿也大通辭清川榮藏下通
羽吉島左十郎支那人曰我ホ佛系いろいろ寺も
大破の為め夫れ砂糖三俵ヲ寄進いたし度
住僧ホ身拭ふ布ハ無きにいろいろと通辭住僧と咄ス
一ツをとりて老僧がいろをさげて献上る船ハ
ハ程赤城費精湖周壬禄程敬倫の五ツ卓ニ
盤四人ツ席をさだむ余も共ニ坐して食ス又画ホ
描くハ姓名を尋る都の人ニ云ホをれのキンジン
キンジンとよぶ

長崎より肱津へ路
左右海をのぞむ其右乃
方を圖(ヅス)海上小島多し

五島
城下

長崎ヨリ七里
西ノ方脇津
此所ニ三崎観音アリ
長崎ノ者多参詣ス

五島

肥後
桃島

悟真寺支那人之墳墓

支那人ハ卧葬
トテ卧タルヾニテ
葬ル

和蘭人ノ墓 悟真寺ニアリ

ヅウルコプトヌ カピタンノ冢(ツカ)ナリ

彼國ノ法ニテモ卧(フシ)ナガラ葬(ハフ)ルヽ

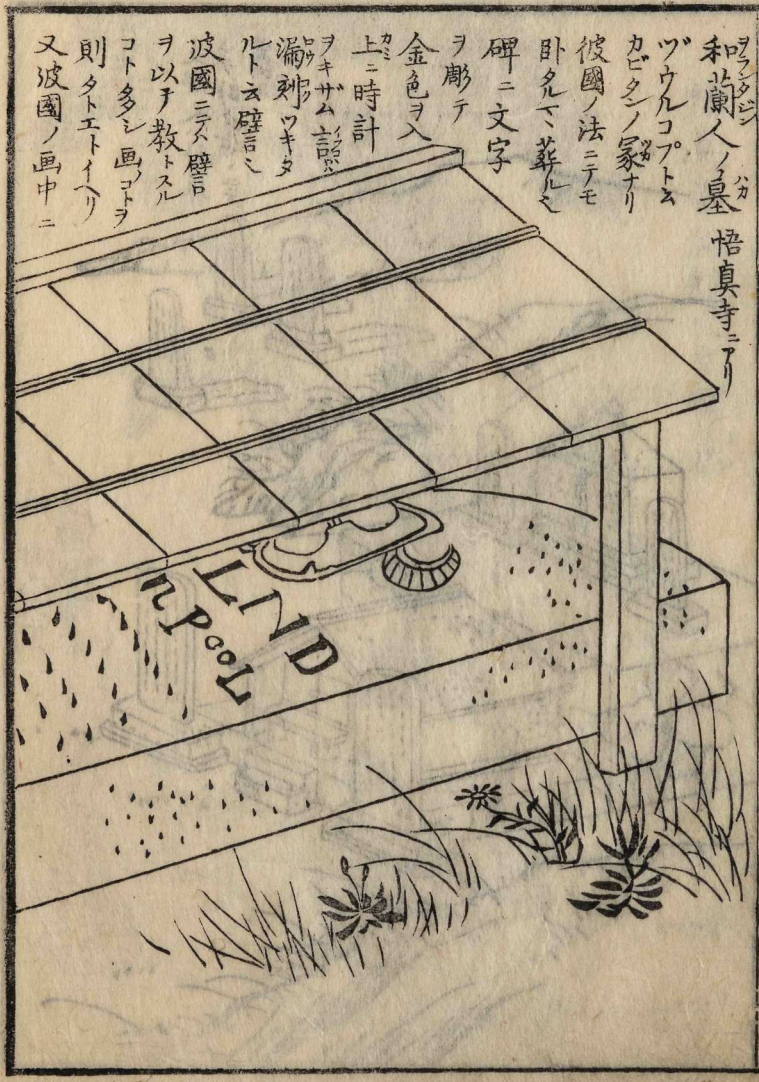
碑ニ文字ヲ彫テ金色ヲ入(カヽ)ル

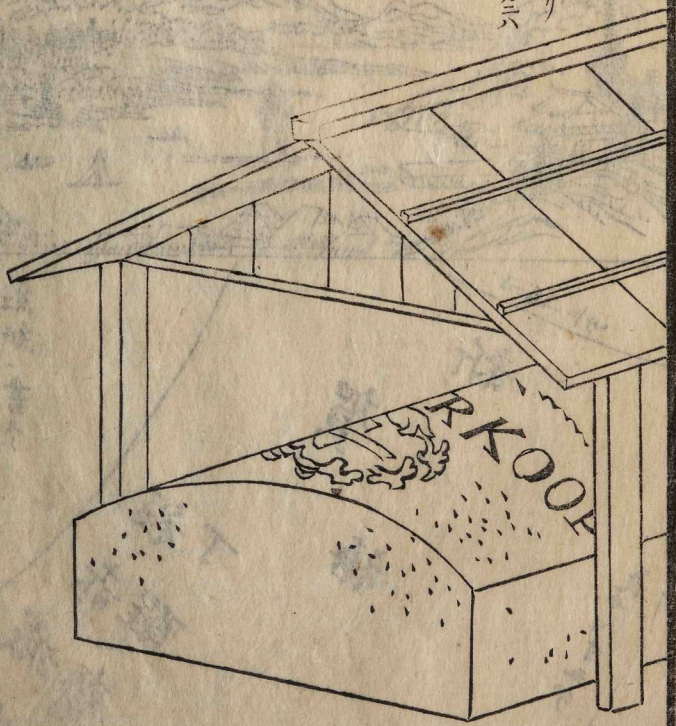
上ニ時計ヲ嵌(ハメ)ザム設(シツラ)ヒ

漏刻(ロウコク)ヲキタルトヌ壁言ヒ

波國ニテハ壁言ヲ以テ教トスルコト多シ畫(エ)ノコトヲ則(スナハ)チトエトイヘリ

又波國ノ畫中ニ





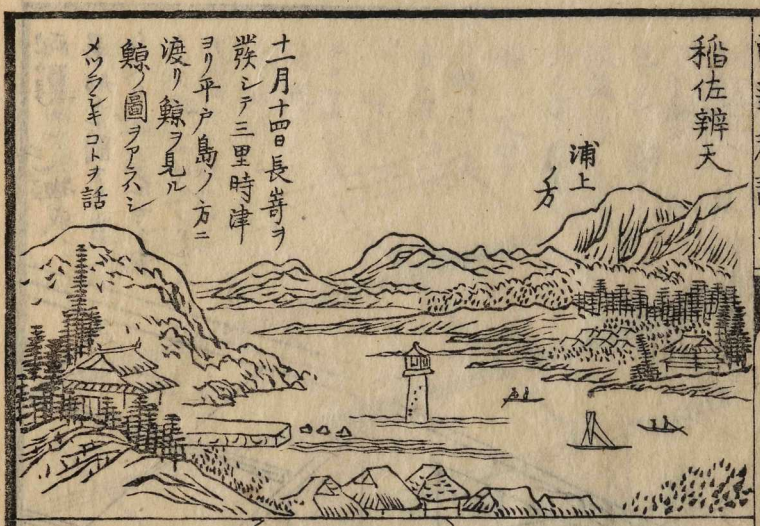
両翼ノ人物或ハ異形ノ圖アリ皆タトヘヲ画(ガ)シタルモノナリカッテ羽ノアル人ノアルニハアラズ

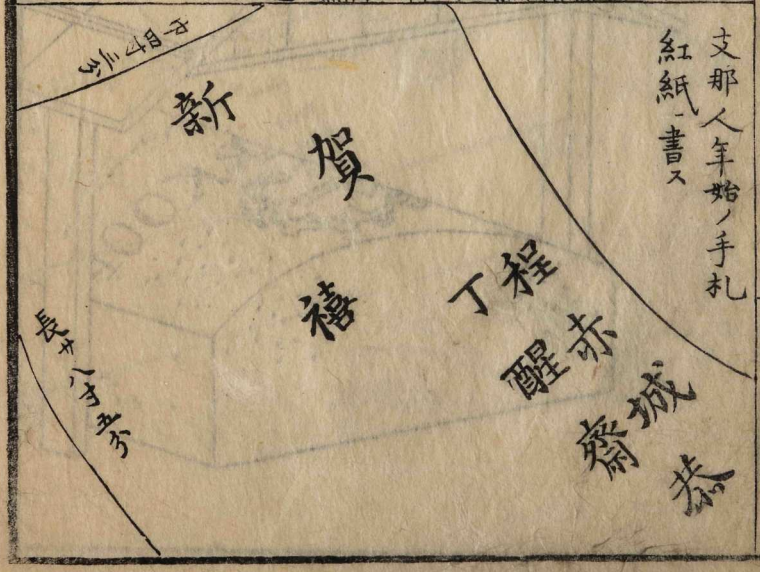
天神社
下浦
朝鮮
日本

稲佐辨天

浦上方

十一月十四長崎ヲ發シテ三里時津ヨリ平戸島ノ方ニ渡リ鯨ヲ見ル鯨ノ圖ヲアラシメツラレキコトヲ話





支那人年始ノ手札紅紙ニ書ス

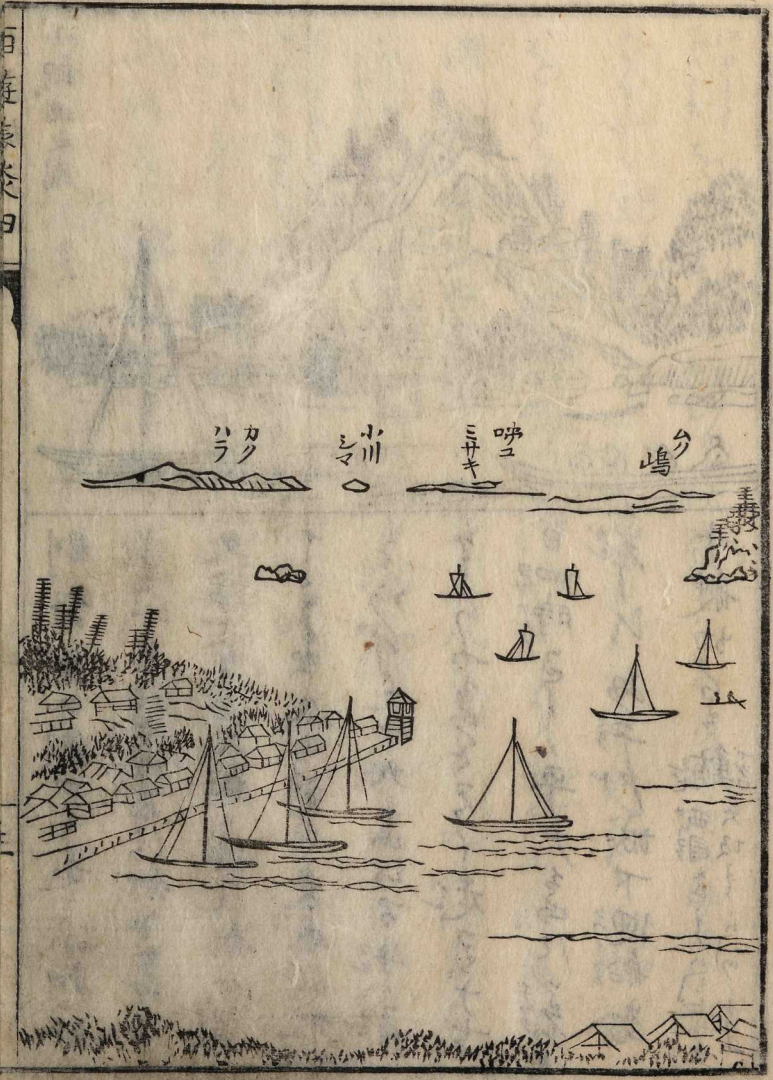
西遊旅譚巻之四

十一月十四日長崎を發(タツ)して三里時津(トキツ)に至る十五日朝船(フネ)に乗(ノリ)て風波(カゼナミ)を凌(シノ)ぎ大村領亀浦(カメガウラ)といふ小島(コジマ)かゝる程(ホド)を船(フネ)を出して又小串(コグシ)といふ小島(コジマ)かゝる大串(オホグシ)島有(アリ)船(フネ)より出海岸(カイガン)を行(ユク)時岩石雲母(ガンセキウンモ)といふ夫(ソレ)より大風雨(オホカゼアメ)にて此(コヽ)に泊(ハク)して十六日巳(ミ)の刻(コク)に船(フネ)を出(イダ)して六里(ロク)を走(ハシ)り平戸領(ヒラトリヤウ)針尾瀬戸(ハリヲノセト)といふ処(トコロ)は大村領(オホムラリヤウ)なれ共(ドモ)平戸領(ヒラトリヤウ)の地(チ)の辨天(ベンテン)沖(オキ)の海(ウミ)といふ半里程(ハンリホド)の中(ウチ)山入組(イリクミ)廻(マハ)りて潮岸岩(ウシホカンガン)に觸(フレ)波(ナミ)うしほ時雲珠捲(ウズマキ)をなす誤(アヤマ)て乗入(ノリイレ)船(フネ)忽(タチマチ)沈(シヅ)むと又海底(カイテイ)岩石(ガンセキ)抜出(ヌキイヅ)る

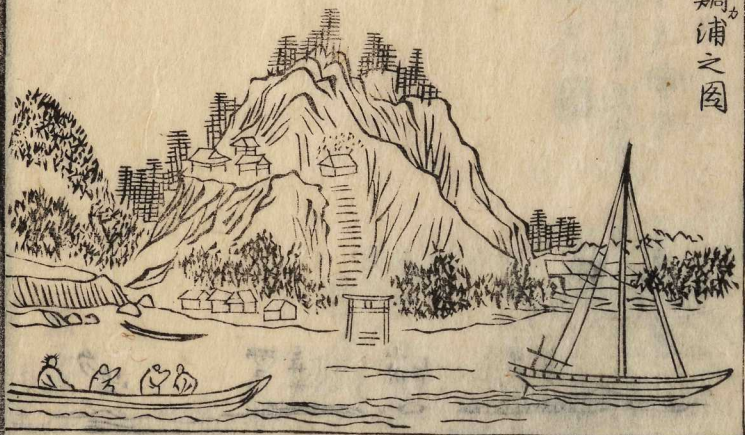
西天一地
西天の一地、
水八白波那辺(トンホツタウ)で沸湯
のめ一湖湯(ウシホシチ)をおろと
宗干湖(ヒシホ)に水乗(ノラズ)

向呼ス長崎の方ヲ

平戸城下
勝香山ヨリ
眺望ノ圖


カクハラ
小川ノミマ
ユヒキ
タノ嶋

小鯛浦之図

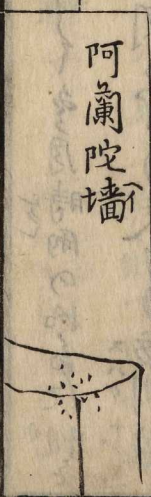


則針尾の瀬戸を越て小鯛が浦
ゟ小島に寄るに船をかける
又ほどなく大鯛浦に船を留
て午の刻ゟ東風に帆
をあげ九十九島の内牛が首
をまわり島をうち走ること十七
日四時ばかり平戸島にて
岸に海辺平戸城下迎船数
十艘かゝる 有 西国をさしてハシビとゝ
ゟ大坂へ入津ゟ

江戸へ下る 船を積て船出して發す 三月時雨の風ありて帆を
そうて紀州灘をくだり下の関をのぞみ夫より防州灘
をこえて阿波の鳴門 瀬戸なり をのぞき土佐の國鳥羽ノ
浦より伊豆の東海を経て七八日ばかりして江戸に着
小田原町 又船中滞事なければ略す 漬るに記すべき事なし
鮪は伊豆より秋の漁をはじめ二四尺のものなり
平戸より五六尺迄あり 就中六尺余は毒あり 此魚 焼ても煮ても 橙ザボン
ダイダイ 十倍なり 雪霜 稀なり 赤大根 赤蕪 菜等を食
土瓶 煮 焼 煮 漬 菜 羹 漬 等 三度
いづれも食事四度にす

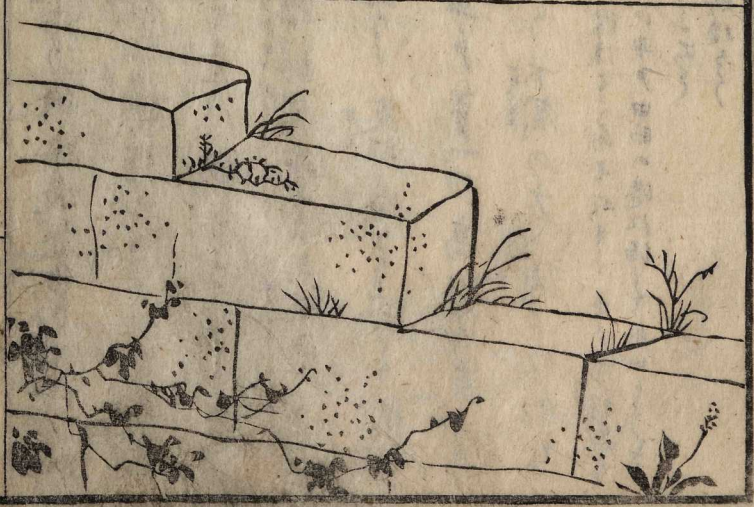
平戸城下観音院の地内鐘ノ支那より渡来なる
裏に支那物にて播州尾上乃鐘と同物なる
記る堂ゟ小松重盛の記まゝ又阿部宗任の塚ゟ
青き和蘭及イギリスゟ此島に船と来りしゟ
園の屏今ゟゟ石を畳ゝチヤンを築ゟゟ市街乃
橋石を以ゝ作る事長崎のゝ昔西洋の人作る今ゟ
ゟゟ寺ゟの開基支那僧なるゟ今に此日を祀るの
俗家にゝび候等掲ゐゝ

記る院地内鐘之図



聖護院御願所平戸島觀音院
奉施入鐘一口應永十二年未
十二月日ゝ彫てゐる

天人樂器を鑄ゐる



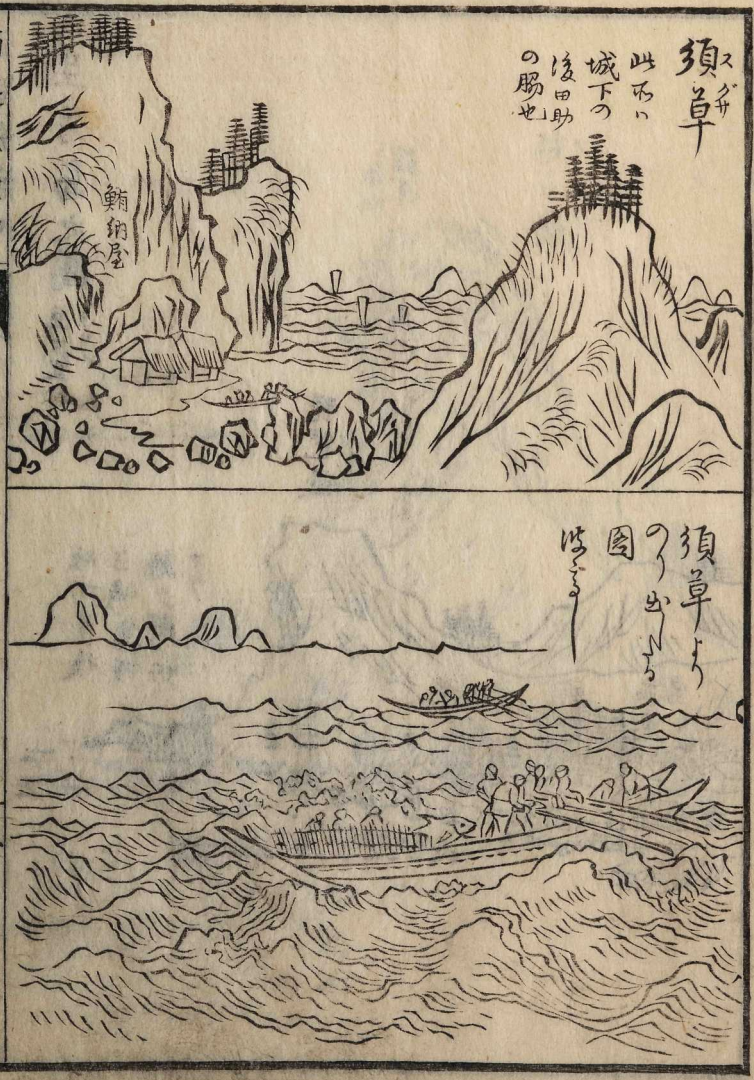
平戸城下より一里北の方白嶽(ダケ)へ行路坂をのぼり山へ入
柴(シバ)をきりて秣(マキ)る馬乃牧を放白嶽(ダケ)絶頂(ゼッテウ)より大島(タイ)宅(シマ)
島(シマ)眼下(ガンカ)に見(ミヘ)遥(ハルカ)に壱州(イキノクニ)そこに多(オホ)き島に對馬(アイダ)を間(アヒダ)に小嶋
二つ布(フタカミ)太髪(トノカミ)と西北遥(ハルカ)に多(オホ)く連(テウセンゴク)朝鮮国等と見(ミ)ゆる乃(ノ)
の方(カタ)斑島(マダラシマ)唐津乃(ノ)領地也西の方日本の地(チ)より支那海(カラノウミ)より西より南(ミナミ)
月(ツキ)島(シマ)(ママ)そこに西(ニシ)に当(アタ)りて山(ヤマ)(ママ)(ダケ)あるは平戸第一の高山(タカヤマ)より夫(ソレ)より
嶽(タケ)をへだて田助(タスケ)浦(ウラ)となる是(コレ)より下関(シモノセキ)の方へ渡(ワタ)る舟(フネ)を
かけ(ママ)る港(ミナト)より方濟日本房州に漂流(ヒョウリウ)せしを始(ハジメ)て一軸(ヒトマキ)の図(ヅ)を経(ヘ)
一軸の図をもて巻中に平戸田助の港に泊(トマ)りて船中(フナナカ)より
の図(ヅ)より全模写(モシヤ)して彼(カ)の国(クニ)の図(ヅ)となる全の図(ヅ)なる故(ユヘ)
山上(ヤマノウヘ)より眺(ナガ)むるに景(ケイ)しく図中(ヅチウ)にて画(エ)もの如(ゴト)く鮮(アザヤ)かなり

薄香浦之圖
平戸瀬トヨリ一里
是ヨリ生月島ヘ
彼ル海上三里
田助浦
唐津山

對馬
北方
東の方壹岐島ノ
壹州
大島亘三里人家七百余軒
宅島人家百余軒
白嶽頂
搜島

朝鮮國
生月
島亘
三里
南ノ
方ナリ
七島
ヨシカ
アリ
左ノ方安
高山嶽
アリ

十二月四日朝風にて城下より一里山を越薄香浦に至り此浦より舟を出し舟人五人にて櫓をおして陸を見て陸に須臾草むらのあるみを入此所鮪納屋一軒ありて余人家なし又鮪漁の為に冬月多く滞る海上三里濤大にて舟中へ入衣服を絞る日暮潮生月多く名産ところ多くにて一夜を明す 二十日


須磨
此あい
城下の
後田助
の勝也
鮪納屋
須磨より
つくしの
図

生月島之圖 周三里ア リ

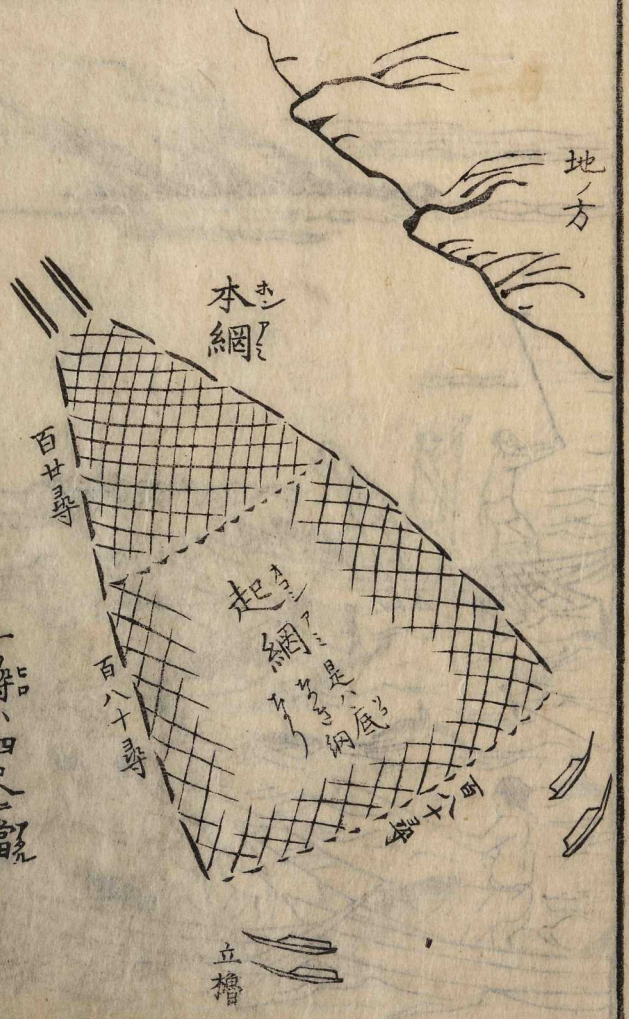
ヤカゲ
狭子嶽
遠見番所
カノ支那
松本ノ方
鮪見樓
鮪網

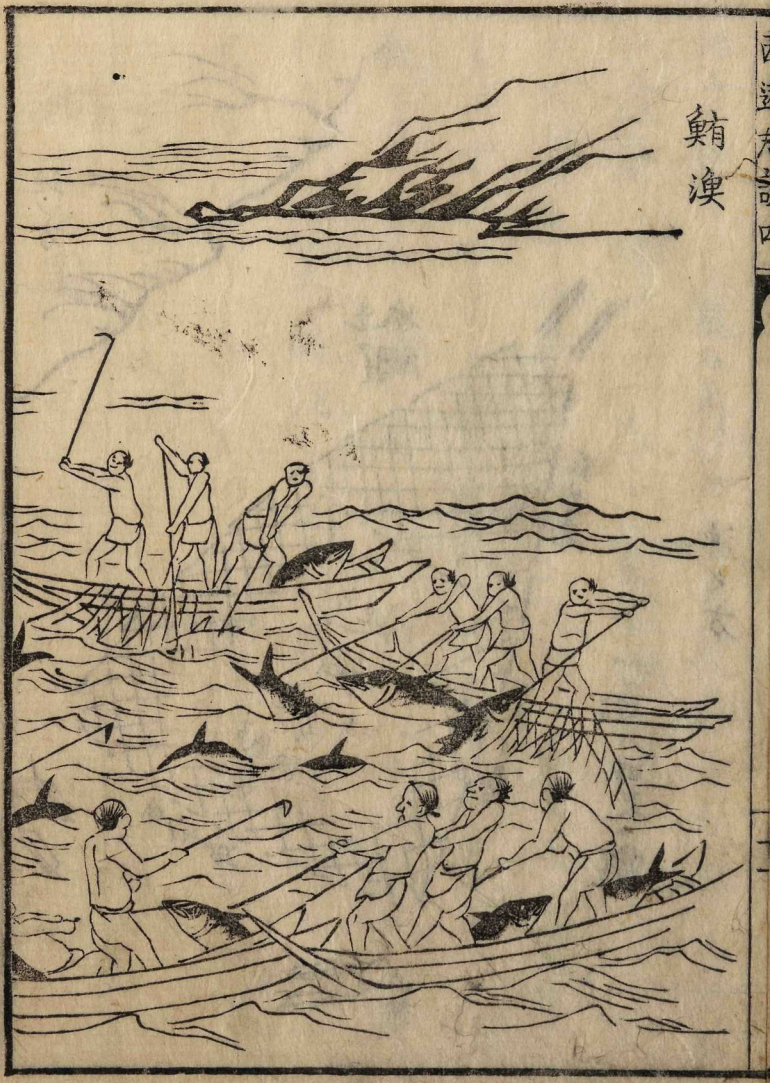
五日四時ごろより嶮しき絶頂にのぼる麓の田夫の家にて石を焼て焼べきもの舎を修む廿町登りて絶頂ふもとに雲見ゆ雲人の口一年両三度にあり西の方暮色国と
そこらしい即
辺邨のごし

ヤ、（ガダケ）獄子ニ
登（ノボル）山中小童（コドモ）
来（キタル）ノ図ノ如シ

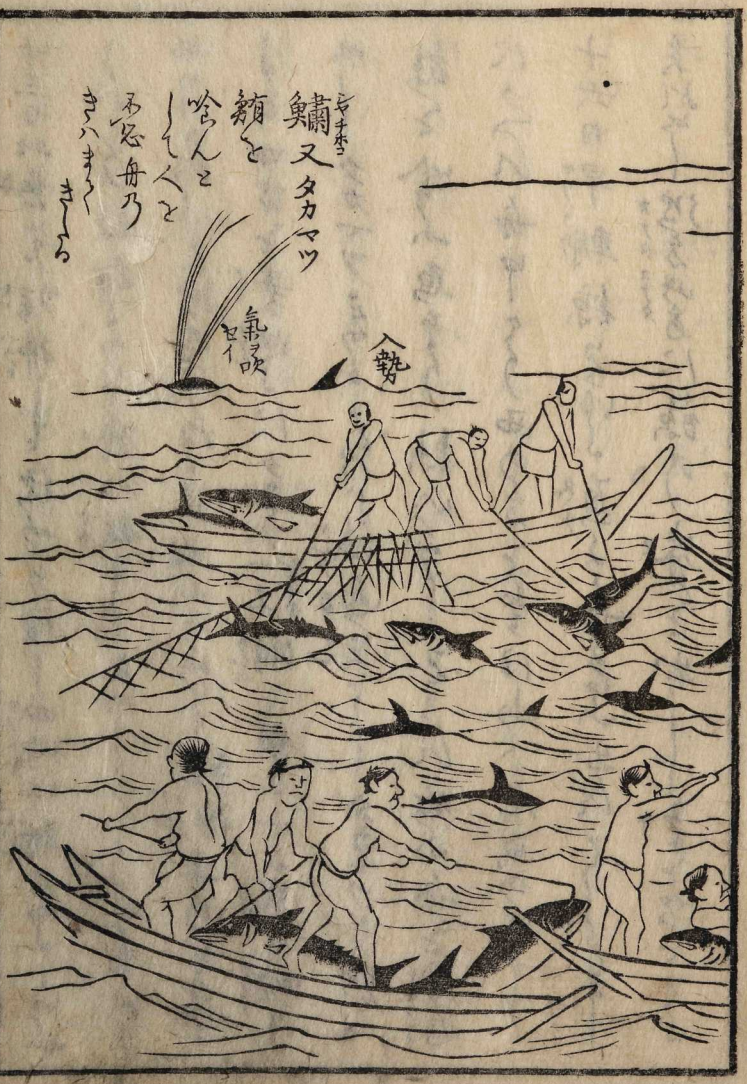
此邊海中より龍の天に昇(ボル)まる龍昇(ボラ)んとするまで海波(カイハ)
雲珠(ウズ)のごとく捲(マキ)あがり天より黒雲(コクウン)降(クダ)り其雲波(ナミ)をまくるごとく
ど波(ナミ)まきあがり天上(テンジヤウ)まで鱣(エイ)という魚の尾のごとき
もの雲の中よりたれ下(サガ)る即(スナハ)ち其の尾を故(ユエ)に此島(シマ)のもの
龍の昇(ノボル)まで鱣(エイ)の尾(オ)まで漁父(リヤウシ)エイノウ八日此魚(ウヲ)のぼるぞ
おそろしき不猟(シバリヤウ)をうれへ鮪(シビ)の季月山(ヤマ)のごとく
岸をもかくまでにおびたゞしき故に山の猟(コシ)に網(アミ)を張(ハル)一網(ヒトアミ)
二三百或(アルヒハ)四五百大漁(タイリヤウ)のごとくして千も入(イル)よし

鮪網(シビアミ)之圖


地ノ方
本網（ホンアミ）
百廿尋
沖之方
一尋ハ四尺ニ當ル
起網（オコシアミ）ハ是ヨリ網尾ヲ
百八十尋
立櫓



鮪澳


鱘又タカマツ
網を
啗んと
しく人を
乗る舟乃
きハまで
きる
氣吹セイ
入勢

十三日此島も燔掃ひて祝ふの日一四時叫鯨来るといふ
これより鯨船のり移八艘こぎ矢のごとくこぎ出るを見
やるにこぎ沈むかと思ふハ太山乃如く主判舟のおそく
こぎ出るを乗廻るにタカ一ツ一名潮を噴き山を映し煙乃
如し一タカ一ツ来るとき鯨逃去る一タカ一ツも別
鯨を咬ふ魚なり鯨ハよく〳〵飛ぶ故ふ舟を生捕
にこぐ舟中より西の方を望に山と唐画の如し
十六日早朝鯨を見る事ふ舟を出すこと第一
矣なれ一此方此辺に鯨乃多を出一ことを吹をそる

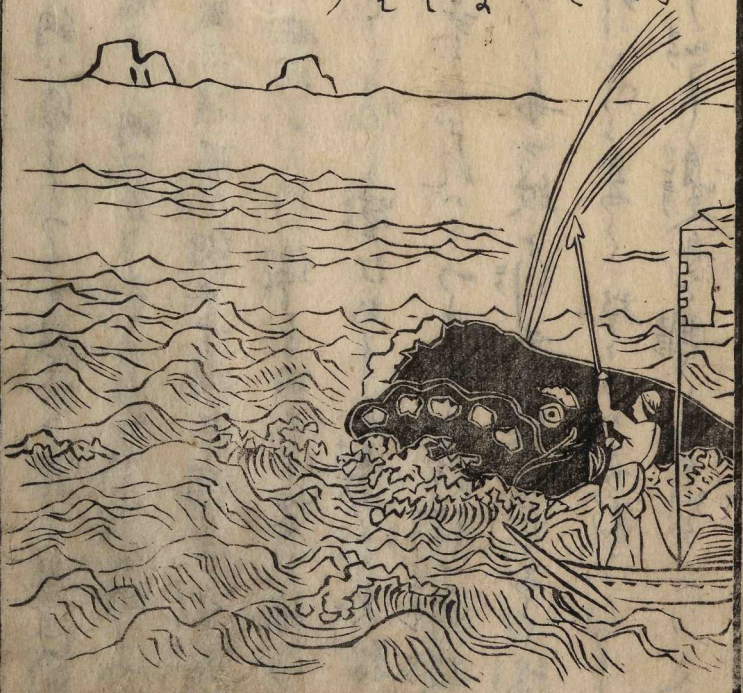
夫より舟ハ鯨のそる方へ追て走先平戸島と生月島乃間の海より鯨いでゝこゝへ入しをそれ舟と生月島の方へ追らんとするやうに見ゆ多分の大島乃沖より一艘の船より鯨をそ奥鯨とゝ叫旗をふりて四方の舟鯨の方にみちびくこゝに十艘そろひ行るに鯨をいまだ知らず巨魚乃大洋海にて跳動するをそるに彼壽山の如くなるを今乗り舟をこぎまわりて水にうかる日をまち初更をまつ

三崎ハ鯨と切解方にて居るより一里ホの方へ

岩石を相波のまゝに少しもうごかず

鯨漁之図

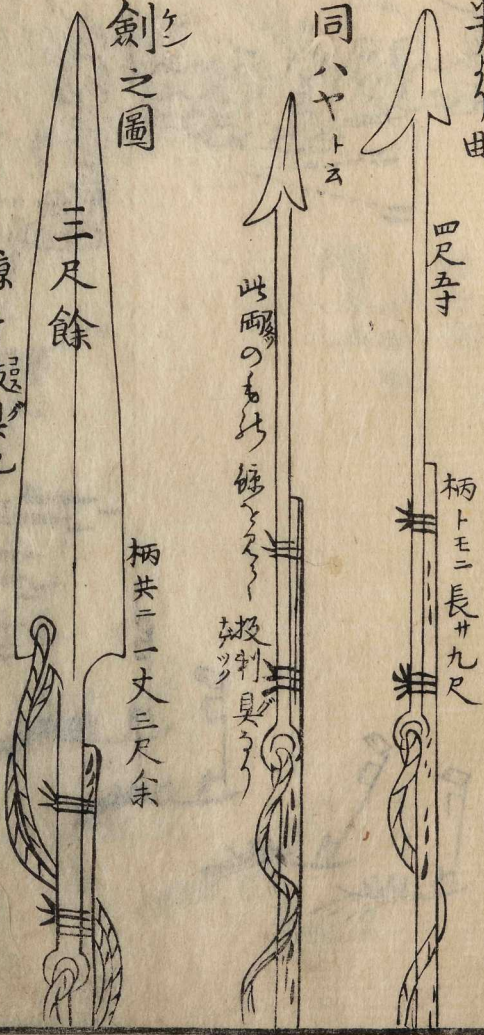
鯨舟ハ二十艘ヲ出ス
其舟ヲ舟ヲ(ヒキ)ツヾル又
網ヲ出シ艘數ヲ
多クツヾ(ケ)一結ニシ六網ヲ二艘ヲ
通舟二艘ヲ以テ此ヲ(モ)ツヾ(ケ)
三結ヲ出シ之ヲ(ニ)ツヾケ
六艘網舟ハ大船ヲ以
足網ヲ積ムヲ



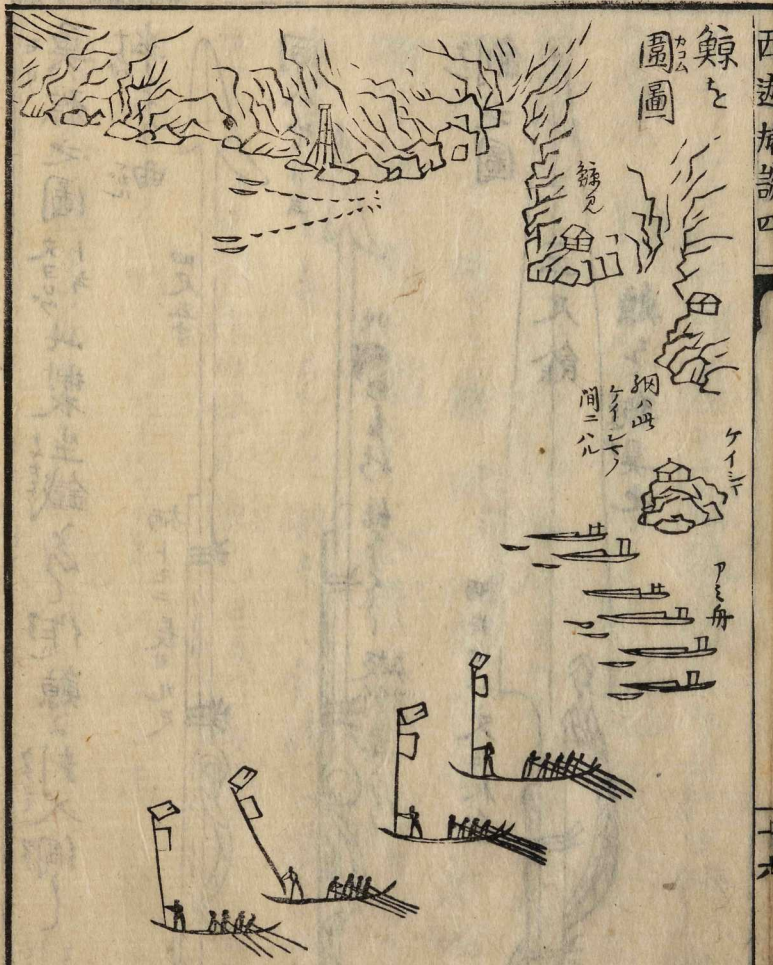
鯨を網にて捕ること網は縄にて造る浮木を以て幕のごとく
海中に張る網の方〳〵〳〵くぐらをおよそ
網は七八百間も海底に沈む網を十間許間を
くぐらせの網に懸ると紀は縄にて切り縄又
頭に冠らせ縄くれども労むかい毎迫り奥猟
は縄の脊を毎と乗りみだればうつりあらび猟一斉投
と紀猟を終るかい毎一艘を引又一艘の毎も猟
をくぐり二艘を引走る者は投るをは毎艘とし
ていかの縄をくるまき重毎を開き縄のうちより又

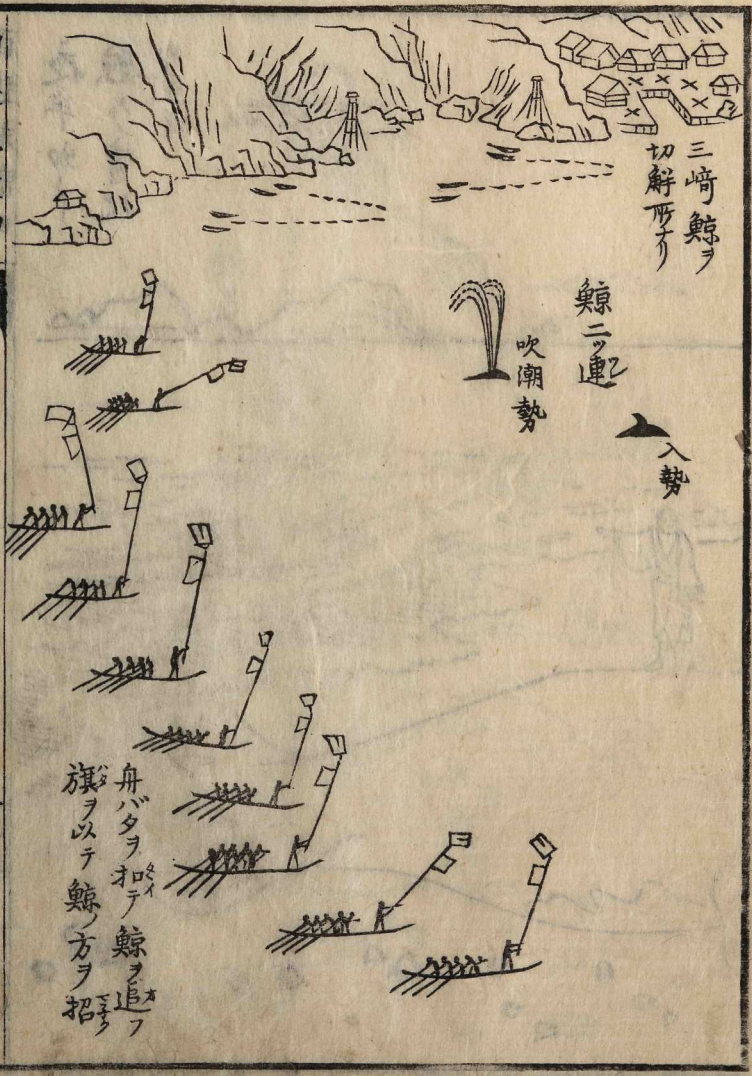
頭を出し咽を吹叫ぶ劍鮫と戦ひ具に筆に記すべからず
鰐鰐を吹ちらし出ると一人の若者海中より
躍入鰐の脊にのぼるや脊と脊大綱を曳透し鰐又
沈んと泳ぐ海底よへやうやうにして突くものぐ脊と
跨りそこゝ又一人の者ハ大綱を持ち沈む底よへ鰐の腹を下へ
旋出すやうに舟二艘に桂をたゝみ鰐を舷へ引舟して渡の方に近く是を
見て鰐更いきり狂ひ共俱に舷をたゝきて港へ至る沖より
見ゆる沈む渡るものゝ舷より刺よんと舷をひきて劍を刺事

と止まる余江漢此海を見る毎に錦浪の起るを見る刺鯖勢子大小の物を将て氷雪を
の働きを戦国の人の如く海に錦の血潮出て朱の色をなす
別て大島の沖（平戸の領島）より錦の多く向海を八九里の間對馬迄に
朝鮮の大海より錦ハ潮の初更を候ふ錦を初鮮所なり
潮を錦乃半を隠す全體ハ黒く夜るの暗きに堪ず
事出て是を見る潮干て全體を海月の光
る大サ十間餘の世美錦也（世美ハ上品也）錦刺又ハ助四ツ
内刺よりて切れ半此を両を度るも
錦全體をするまで稀なり


銛之圖
又ヨツトキ
此製生鐵ニテ作
鯨ヲ刺入綱ヲ引カケ
半ハ曲
四尺五寸
柄トモニ長サ九尺
同ハヤトキ
此両ノ方ヘ鉤ヲ
投判ノ
劍之圖
三尺餘
鯨ヲ殺ス也
柄共ニ一丈三尺余

鯨を
カラム
圖圖




三崎鯨ヲ
切解所ナリ
鯨ニ乗ル
吹潮勢
入勢
舟バタヲオロテ(ペイ)鯨ヲ追(オ)フ
旗ヲ以テ(ミセ)鯨ノ方ヲ招

夜半ゟ
鯨ノ背に
のぼる

鯨鯊人

鯨切解圖 此所ヲ三崎トス

鯨大腸ヲ勢ヒ引出ス圖

又ソノ奥ノ奥ヲ見ル

小海老ヨリ小ナルヲ奥ノ奥ト云

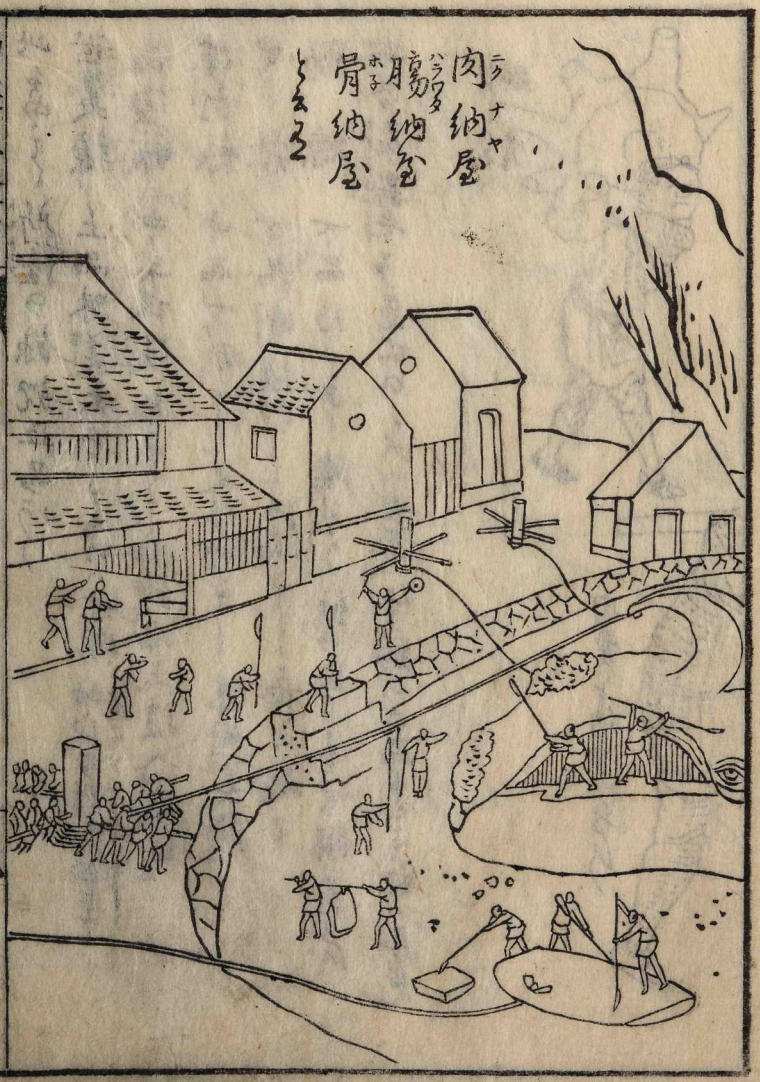
又鯨鬚ヲ見ル

万力車ニテ捲ク 七ヶ所ニ在

大綱ヲ以テ捲ク

ライ島見ル

ライ島


ニクナヤ
肉納屋
ハラワタ
腸納屋
ホネ
骨納屋

此魚ども所取(トルトコロ)の鯨凡五品ありて
世に美鯨 上品味美大なるもの八十間油鉄百樽を出す
長須鯨 中品味淡泊(アワ)にして須(ヒゲ)長し海上(ニ)浅く入(イ)て底(ニ)走(ル)
常の鯨 中品廿(ニ)剛(ツヨ)くして又乏(トボ)しく味同(シ)く長須(ニ)
叱鯨 下品剛強にして潜(モグ)り甚(ハナハ)だ深く
鰯鯨 下品乏(トボ)しく稀(マレ)なり鯨の名ありと雖(イヘド)も
右各(カクノ)氣異(コト)なり予見(ミ)る所のものハ世に美(ビ)なる頭(カシラ)の二品(ヒン)なるのみ

一まい竹
錦のひきてをヒレをうん
ロけるとき
歯のあー
別エラ
ありり
前切て
人夫二手渡うり
ベツタウトゝ者
人夫をゝ
図するもの

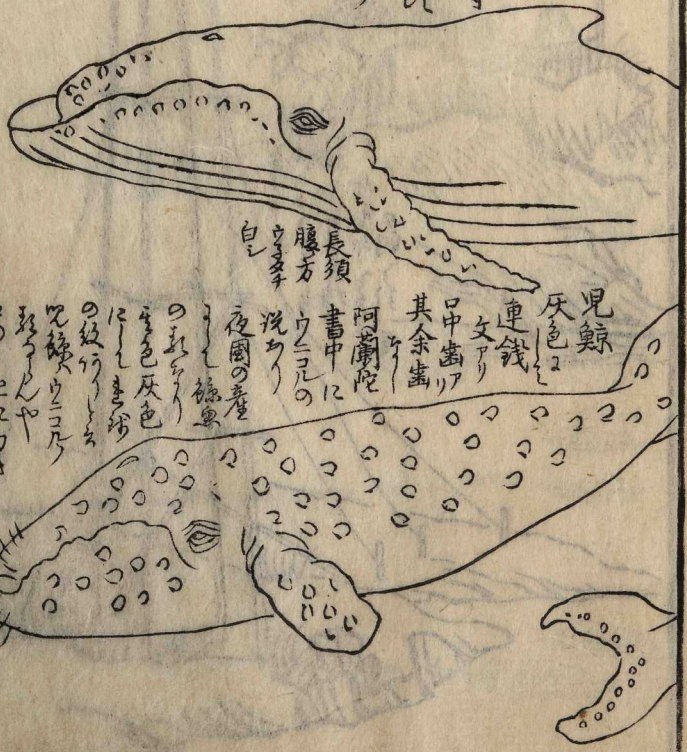
此ヘンコブ〳〵アリ
生胆鯨
腹の方ウすりろ
鬚鯨
世美

長須鯨

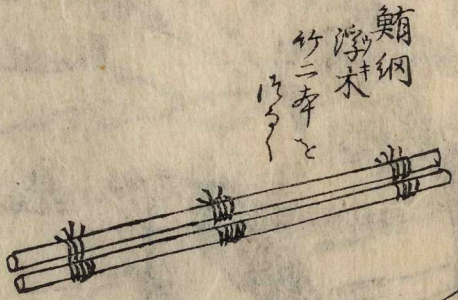
長須鯨（ナガス）　鬚鯨（ザトウ）　腹子（ハラコ）

大サ九尺

生ル世美児鯨余腹ヲ八寸ヨリ一尺五寸総ヲ鯨ノ卵（ランセン）ノ如クニシテ多ク生ル又一丈ヲ又ハ一丈ヲ越ル人ノ如シ



鮪見樓（シビミロウ）


鮪网
浮木
竹二本と
ひもつく

是ハ貝よりとるゆゑ肉ハいまりのごとくなり
貝生ル緑乃腹の方につく貝ハ右の図のごとし
生胸肉肉色
貝の色白
切口
白
生ル緑の筋ヒレ肉うしろ骨方
切口ヨリ油肉

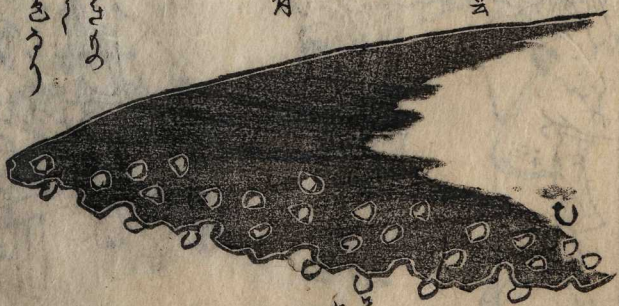
此貝ハ
世美鯨
の背又
尾鰭
ニつく

岩の如イ
ものゝ
貝ハ
海岸の
石ニ
付て
居ル

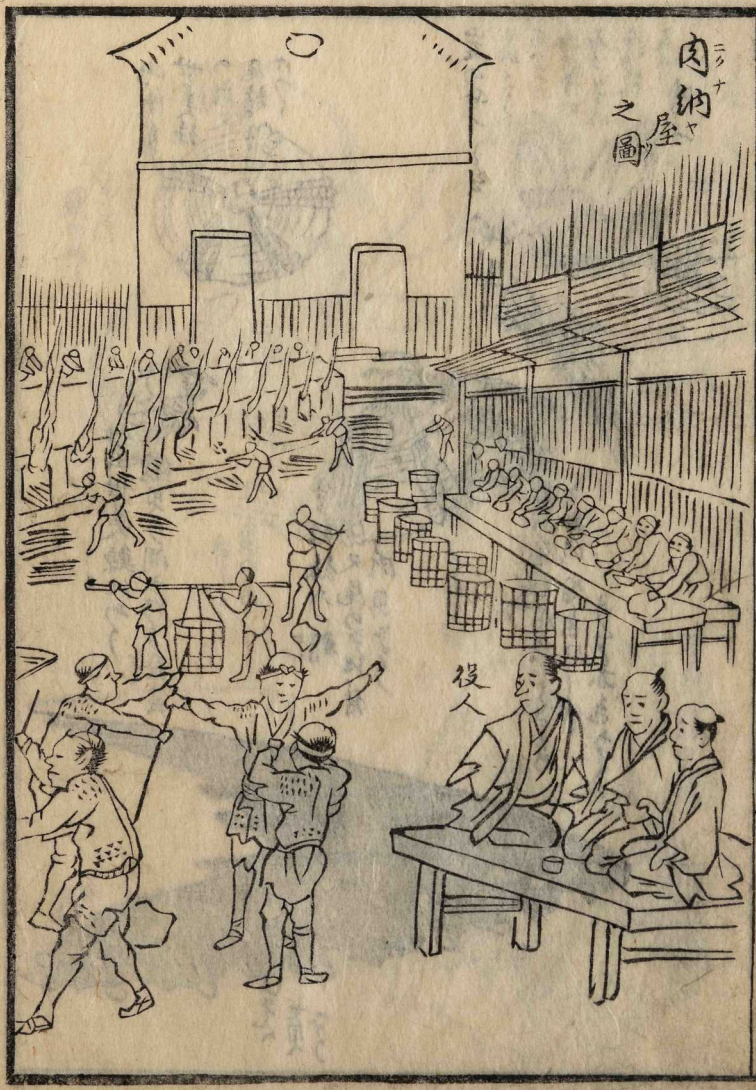
此虫世美鯨に
瀬貝の間ニ
居ル虫ニ
て

生ル鯨ノ鰭
又尾の
ニ有ル
附貝ニ
ハ

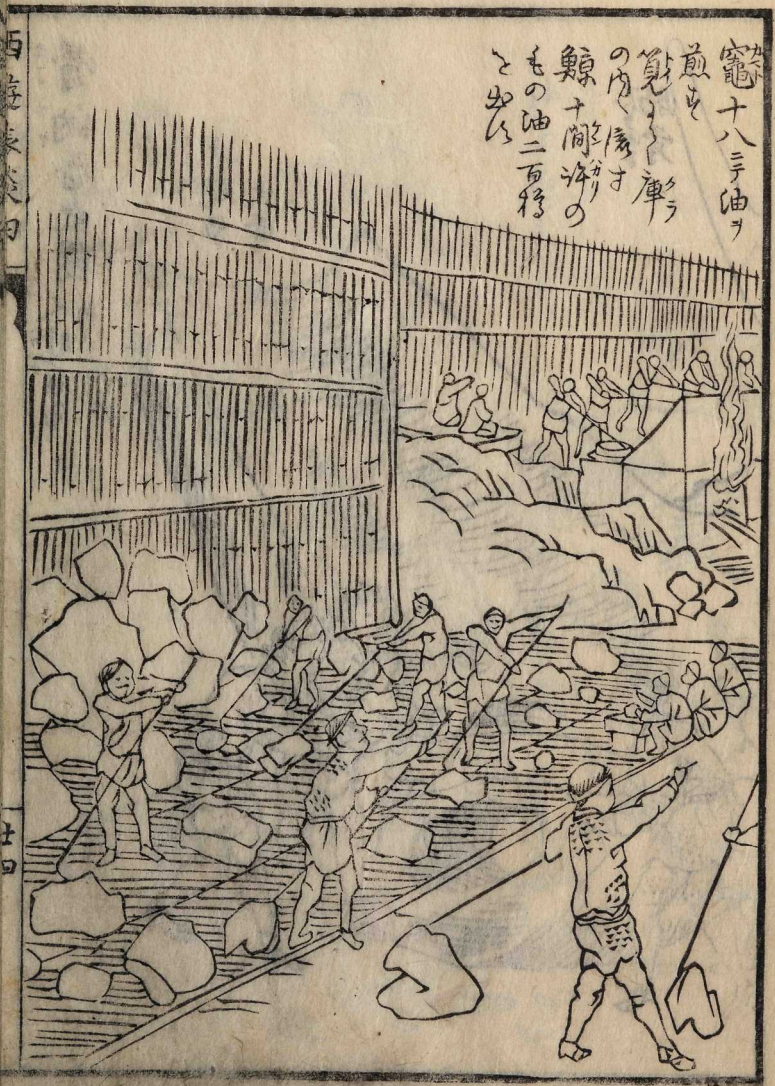
貝の色白
と出ル
ニ
ハ
ハ



七貝ハ
ニ
ハ



肉納屋之圖


竈十八ニテ油ヲ
煎ル
篦ニテ庫ヲ
ノケ傷ス
鯨十艘許ノ
モノ油二百樽
ト出ル

骨納(ホネナヤ)之圖 又膓納(ワタナヤ)多あり

骨を小く碎キ
油と為ぞ

此魚 アミナシトラノヲ又カジキトンシトモ云 土佐の國にてカジキ通ラノ舟の底とつゝく

尾より頭迄のかつをぶし一丈余

此魚八生月にて突留る者の事所を詳にやるとなす 正月の料理に用ゆるよし

ライ鳥

世ニ希ナル鳥ニテ緑漁ノ名アリ
形ハ鳧ノ如シ肉ハ鳧ノ肉ト味ヒ等シ
ケレドモ鴨ニ似テ大サ白鳥ノ如シ嘴ハ短ニシテ
ハ歩甚ダ少シ

頸ウス黄

嘴生際脂ウス色

タカ一ツノ歯 一名鱲

緑鶏ト呼ブ魚也
手此歯ヲ以テ
洗ヒ落ス

此圖ハ此島の漁父に學ひ圖ス
海中に潮を吹事を出ん為ニ
又ハ其全體を見
世美爲ニ同く潮を二筋よ吹
くらゐを世美の爲ニ一筋よ吹く

タカハツ
一名シヤチホコ
大サ二間余

如圖ㇾ示又錬條八余通一ㇾ布のごとく張ㇾ之ㇾ其ㇾ
ㇾ上ㇾ毫毛も虛言ㇾ之ㇾ文章と雖ㇾ及ㇾ難ㇾ
ㇾ盡ㇾ之ㇾ五島平戸ㇾ及ㇾ紀州熊野浦端ㇾ之ㇾ所ㇾ之錬ハ小ㇾ
ㇾ文のごとく通ㇾ過ㇾ之ㇾ錬の全體と云ㇾ者ㇾ
ㇾ五島ㇾ城下ㇾ迄ㇾ事ㇾ八里の所ㇾ平戸
ㇾ同五里又八十二里ㇾ錬通ㇾ極月
ㇾ正月初旬ㇾ漁ㇾ小ㇾ捕ㇾ者
八人刺ㇾ一人他ㇾ者ㇾ事ㇾ錬ㇾ毎ㇾ
ㇾ毎ㇾ霧ㇾ小練ㇾ錬ㇾ命ㇾ漁ㇾ

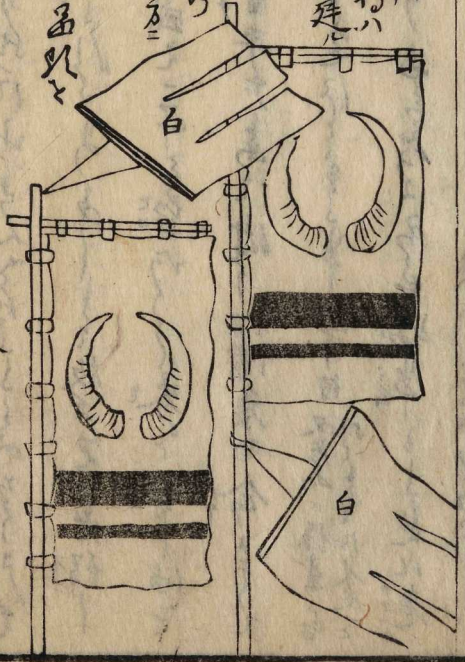
幼きより海邊に育りて游ぐ事を習ひ
波濤のうち巨魚にうちまじはりて放ち
よく虎狼を殺すの威を示すに拳を握り油を
扱出すごとくして金嶺平戸島に渡り松浦矦の命によりて
生月島益富又右衛門宅にとゞまる事三年日
出海をもつて三年と申す 錄事あるをもつて
なほ年ふるに及ぶ 元日此島を門打とゝして雜煮といふ事
四月此島を出帆して平戸島の方白嶽のもと乘組數

又に漕て赤壁と號る奇巌油水よりそびえ
岩壁赤く大赭石のごとく画のごとくに聳り
乗舟此所田助にかゝる
夫より舟を出して平戸城下に着

鯨舟旗乃圖

長須子村ハトモの方に建ル

勢美のごとき物を舟乃
表に建ル坐頭ハトモの方に
多くたてる
皆旗の建ること鎌の図の如
きまるまり



紋牛の角まり

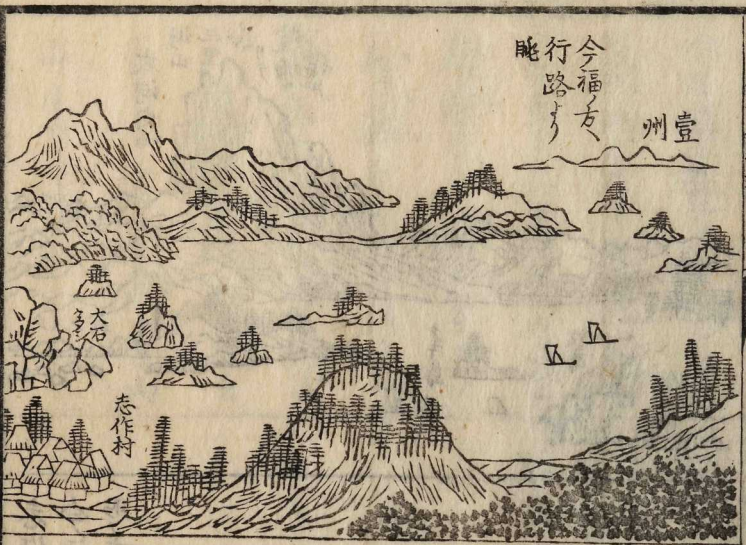
西遊旅譚巻之五

正月八日平戸島を發(ハツ)して田助(タスケ)羅の渡一里夫(ソレ)より御厨(ミクリヤ)
三里又(マタ)一里にして調川(ツキノカハ)と云(イフ)所社人の舩舍(ボウシヤ)有(アル)所也
の山中之(ノ)此(コノ)邊海岸をめぐりて風景(フウケイ)よし調川(ツキノカハ)より
一里壱伯(イチハク)村(ムラ)こゝもまた人家(ジンカ)多(オホ)し今福(イマフク)と云(イフ)二里ありとぞ
聞(キク)ゆるに久(ヒサ)敷(シク)して四里ばかり行(ユク)と入海(イリウミ)有(アル)舩(フネ)
三里伊萬里(イマリ)に有(アル)此(コヽ)まで鍋島(ナベシマ)侯(コウ)の領地(リヨウチ)にて
燒物(ヤキモノ)あるを以(モツ)て大河内山(オホカウチヤマ)有田山(アリタヤマ)此山中(コノサンチウ)にて燒出(ヤキイダ)す陶器(トウキ)
日本國中(ニホンコクチウ)にいづる

十日風雨ニて
此夜山ヲ下リ鯰(ヤレキ)野村
山の半ニて雨ふる此夜
唐津(カラツ)ヲ伊万里(イマリ)乃
封境(サカイ)ニ宿ス
陸(トクスヒ)路にて此間
三里ゆく濱崎ニ
て宿ス(ヤド)此夜
山ヲ下ル

大河内山
此山三里ヨリテ焼物ヲ作ル
村クスク
牧島
クキ島
立
立

志作より今福ノ間ハノ方ヲ眺
文島
ホシカ浦
鮹樓海中にそそり立ツ

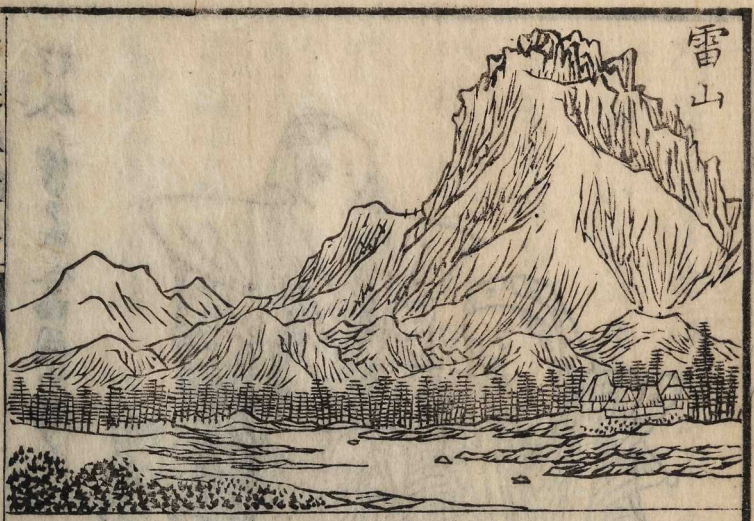


十一日徳末を發(ハツ)して行くこと二里半吉井村に到り吉井川を渡(ワタ)り宿をこゝに出る所西海唐津の城海濱(イリウミ)を
濱(ハタ)づたひに見ゆる水野侯六万石ノ城下なり又行くこと一里半深江(フカエ)に到り二里ほどを經て前
原(ハラ)といふ町あり此邊より筑紫(チクゼン)の雷山(イカヅチ)の
下(モト)をとほる山のうち唐画のごとく
雪れ殊に降(フリ)てをり頂(イタヾキ)
不動堂といふ又瀧あり

十二日まつ船を出つゝ半二里今宿にまつみりて二里にして
姪の濱といふ所人家つゞく一里ばかり福岡あり 黒田侯五十万石ノ城下ナリ
夫よりいさゝか里博多あり富商多し 昔唐船ノ入津シ処ナリ博多織ハ是ニテ製ス今ハ其製ナシ
西の方海つゞき南ハ山つゞき城ありて橙家々の植木常に緑なり
所々石觸ものこりて山谷のまゝ又石炭を出す
正月五日此地に初て松林といふをみる扨家々
戸ごとに酒肉を設祝ふ又こゝに博多町人麻の
肩衣をきる下ハ裁付をきて上に六尺を纏ひ
脚ごしらへ巾着を戴き草鞋をはく福岡の城内へ入玄関にて

酒とのみそうる是を松林と云ふる所謂ところなど
いくへ博多ハ唐船の渡海して今も繁昌のまゝ福岡の
領地なれ故なるべし今に奉行迎ひ所ハ御役屋敷
或ハ番所を出し梯田の祠博多第一の大社なり柳町
なども色町なり

十六日博多を出て筑前の境を見る人家ハ繁
崎ハ幡夫より松原を通る青柳と云四里此辺ハ
蘆多く殘の雪ハ見へて景色又山中に入二里ばかりを歌町と云ふ


雷山

モロミ河ニカヽル
橋七千間余
妙高山
弥前山
くろくろと
峻峰

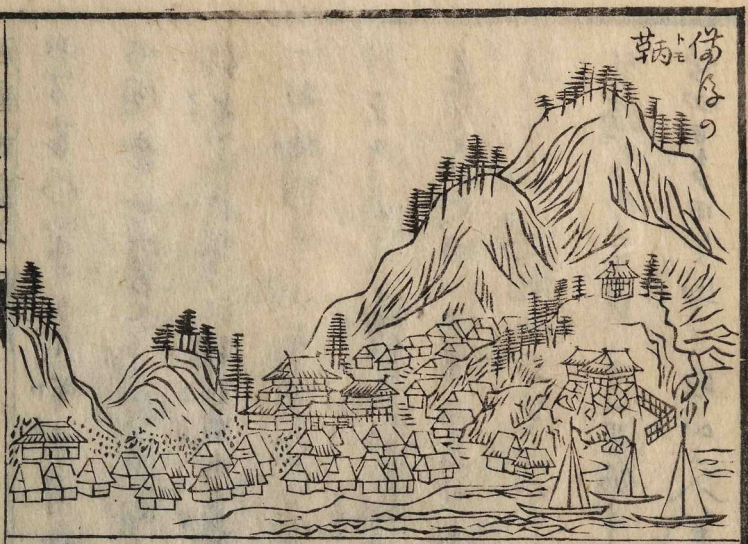
杉林（マツバヤシ）博多町人福岡ノ人

行事二里赤間に宿る十五日赤間を発て十里四里未
屋瀬にいる此辺田畑廣原に続く一名白川ナリ　母頂ハナシ蝦夷ニ多シトイフ　此辺
石炭を堀出すを石炭のうちより石を出し時木紋ありて
杉枝の化石し事奥羽に石炭山の続より出る翻根山神代
枝のごし林地中に埋れ石と化し猛黄の気を発し燃るの
甚臭気ありて油と猛黄とを製し猛黄はなはだ
木紋ありて化石のうち甚大石にうち枝幹しかつて木のごし
木屋の形ち長崎くの西洋うち是うち甚だ多く出る中倉に
いる小倉うち三里海をへる即下関　赤間うち

藍島
大島
名島并天
海中路
灘濱
亀
宮崎八幡社
博多町百八町有

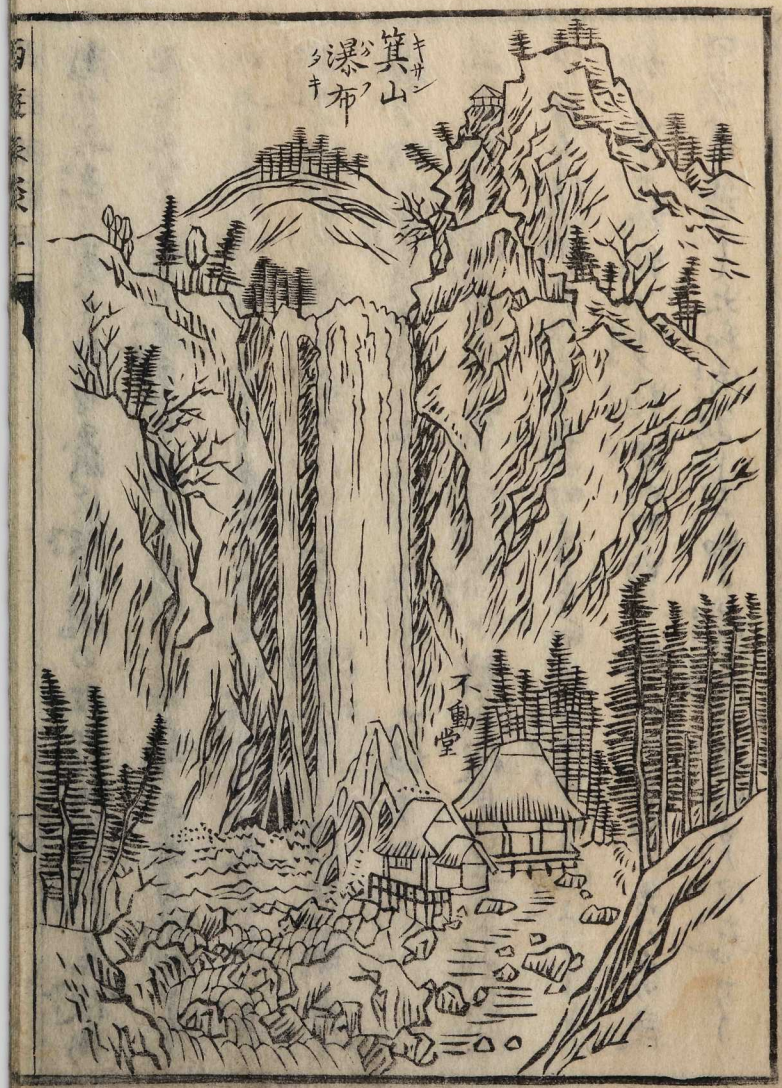
天机シマ
玄東シマ
鹿ノシマ
東照宮
福岡ノ方
ウジシマ
燈台

廿一日下関より船を乗小西風吹て方州(ハウシウ)彼(ダ)浦(ウラ)へ着る事三十五里奴和(ヌワ)と云小き湊へ船をつける人家十八九軒ありまた又西風に帆をとめげて藝州の内忠海(ミタラヒ)へ着る事を得ず此浦の西岸人家の一廿三日出帆(シュッパン)一昨夜の潮(トモ)より来る船を待(ヨセ)る福山の飛地と人家八九町ある船よせ也ここに世(セイ)話(ワ)する役人(ニンク)酒肉(シュニク)売(バイ)人(ニン)一廿四暁帆を揚(アゲ)廿五日の朝牛窓(ウシマド)へ着る岡山ノ領地此所より船より陸地(カクチ)をけふの七里程の高山(タカミ)へ登る二月十五日の雪山を発(ハツ)して藤井(トウイ)一市吉井川を渡り(ワタリ)伊部(インベ)より上(カミ)八木山(ヤキヤマ)をこえ三石有年(ミツイシウネ)


備後の鞆

備後の牛窓
牛窓

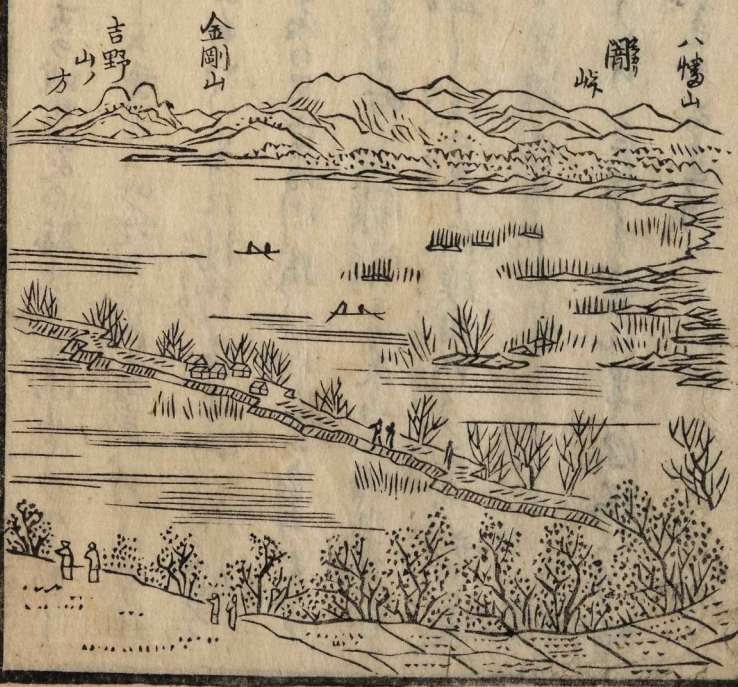
此方茂り山有り川有り舟渡し西条郡加古川と大なる
川筋辛町一里ほど行き明石舞子浜続き須磨浦迄
絶景なり兵庫に楠正成の墓ある山に入布引の滝を山下
一村物静かにて家居ほとんど雪の如く生垣の柴は来
ほとんど麓より麓迄山を登ること西の方なる
是ぞ大坂へ当二月廿三日浪華新地を初め池田
辺と迄池田の里にて池田川と云ふ町四五街を
過ぎ行くと一里餘り多田の社を温泉地と
廿四日多田を出で源山に入鷲尾山に登る渓谷


箕山
キサン
ノ瀑布
ノタキ
不動堂

数千丈にそそり那智の滝山にのぼる路甚狭隘
石をうがち越る勝尾寺観音堂あり西三十三所の札所なり
山上より大坂の方を望む五里ばかり遠に城見ゆ実に山もとは
山田の村とも此あたり西谷にあつまれり食店あり河と二筋舟を
渡る一つは長良の渡しなり渡りぬれば大坂へ入
二月廿八日浪華を出て岡崎を越て伏見の方へ趣
又豊後橋をわたり京町を三町ゆけば裏手は畑みち
畑の中に桃樹を多植方六町ばかり桃山と名づく古の長良
の方、此辺も大和路をはなれて畑と諸侯の名ばかりにあり

宇治見臺山などいふも古の城内庭の跡などにや小山などのつゞきて
湖中に堤ありて小島堤とよべり秀吉此堤を築き李良りて宇治
を廻り遠far堤三町ありて岸に楊柳多く植立なり
臺ありて古の方ハ宇治の里宇治川流れ向ハ李良山なり
遥に金剛山吉野山見ゆる右ハ粟岸モロ木山八幡山などの
湖中漁舟槳を盪して堤の半に澳村ありて桃の花
ちらんとして山吹卯の
墨染の里遊亭ありて寺に墨染桜ありて檀
町今ハ一つのに趣きのこもろ

宇治より嵯峨へ一里の図

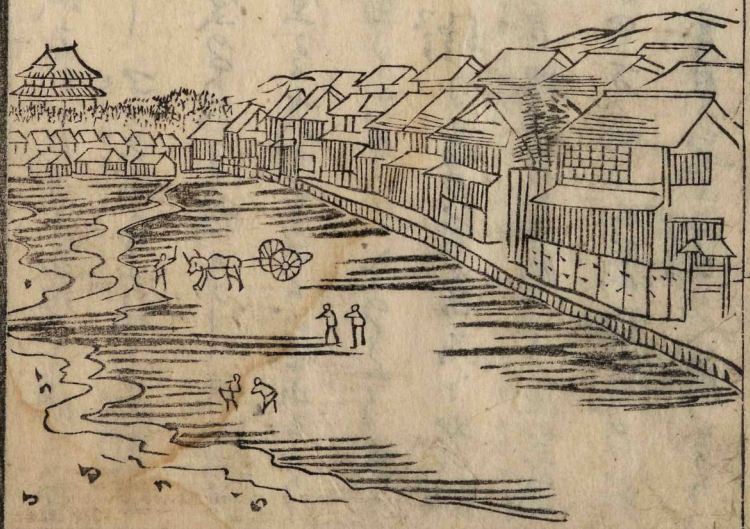


黄檗山
宇治山
春日山
魚肉ヲ
網ヲカケテ
乾ス

三月朔日宇治の方にゐ伏見御幸の宮のそとも桃山の下城跡と
左にそゝ小地名木幡村そもて黄檗山萬福寺ハ唐僧
隠元禅師(サンケンゼンジ)(ゼンオウ)承應の比創立(ザウリウ)大伽藍そうそれそう三室
堂橋寺恵心寺大和良し方春日山大佛殿(タイブツデン)(カウブクジ)萬福寺郡山
の方そう法隆寺立田の山吉野の方まてすぐそ是を
大和廻そう古蹟多し(コセキ)(オホ)(ヒト)能人の知る所なに不載(シラ)(ノセズ)
そう云ふ出ず數日留れ名所古蹟多かるべし(メイショ)(コセキ)(オホ)(トヾマ)
略す四条橋そ(ハシ)ワたれ東山(ヒガシヤマ)の方にゐ祇園町遊亭
を祇園の社夫そう八坂(ヤサカ)の塔そ(タフ)ほ祝まの方へ行そう

西坂と小野天神の門を紙屋川にうつる小橋を渡り雲
ノ社のうち名のみにて梅多く　守家多き社と鳥居
表より拝堂をも法堂をも八重梅多く夫より
二十餘町ゆく嵯峨釋迦堂を七八町をしの嵐山なり
松の木陰より一二重梅さきそめ大井河とのぞめる
桂川より山ハ丹波のうに続きたる茶店と出
かけて酒食
ゆきて梅を賞するを時節梅と名づけて虚空蔵
堂をも茶店より夫より東の方、嶋ある池花尾の社
梅宮をも甚雨ふりて来る人稀なり

三条橋より四条を望む



清水觀音
東山
八坂塔
大佛殿

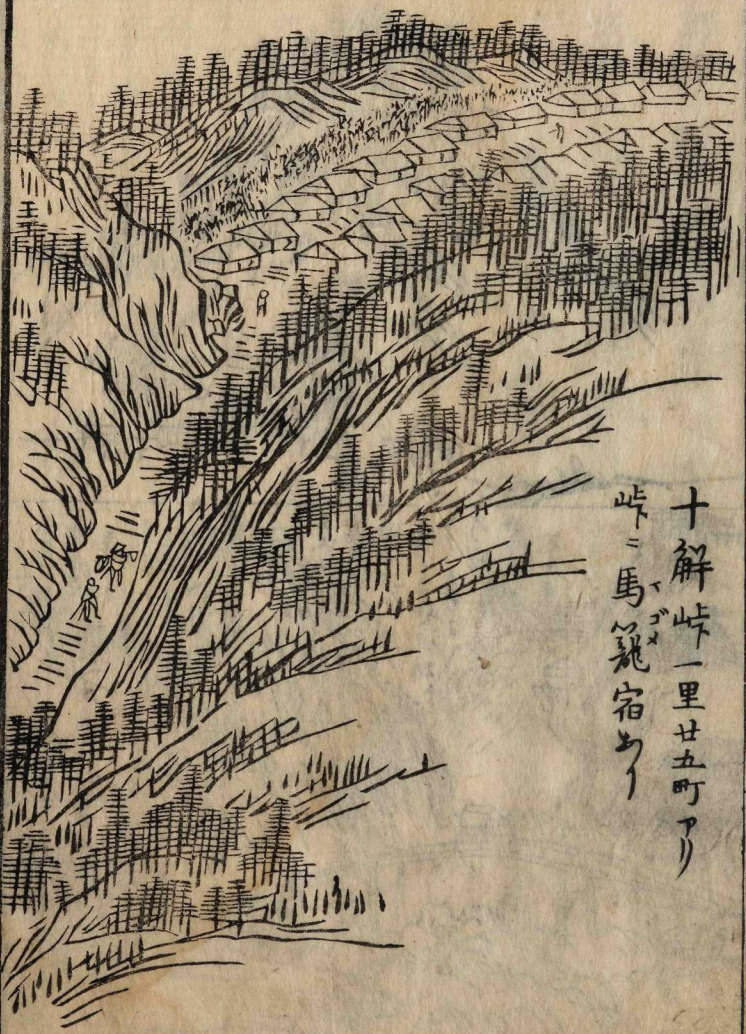
嵯峨嵐山

虛空藏堂

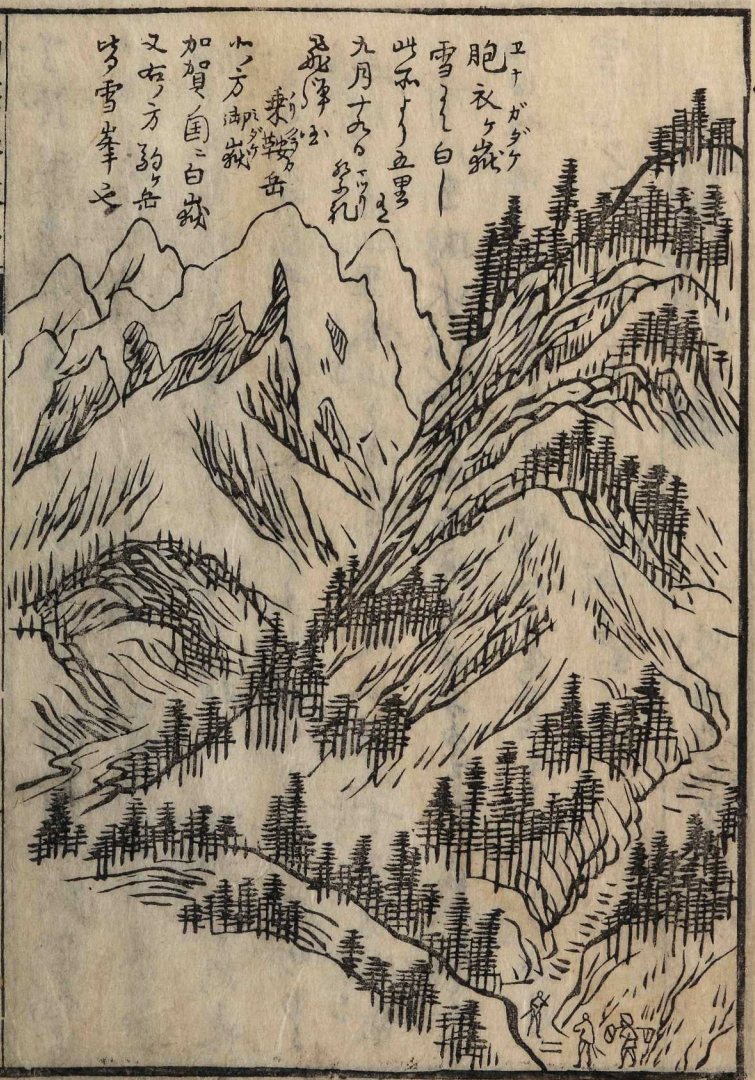
移る〻桂の渡千本通る此所女の方に東寺に弘法大師の像此る絵る開帳なり三月廿一日より詩人未詩多し本堂八千手観音法堂ハ薬師等其外大伽藍多し

〻を仁の如く結ぶ羅城門有 西本願寺又本國寺の前を過て西南の方を廻る〻〻る小東の方 巌山近江ノ鞆馬貴布祢賀茂時人の志茂ものゝ話

入鹿山
唐僧寺
夫婦龍
玉木宿
過分孔岐岨路
大井
野坂
堂
地蔵岩上

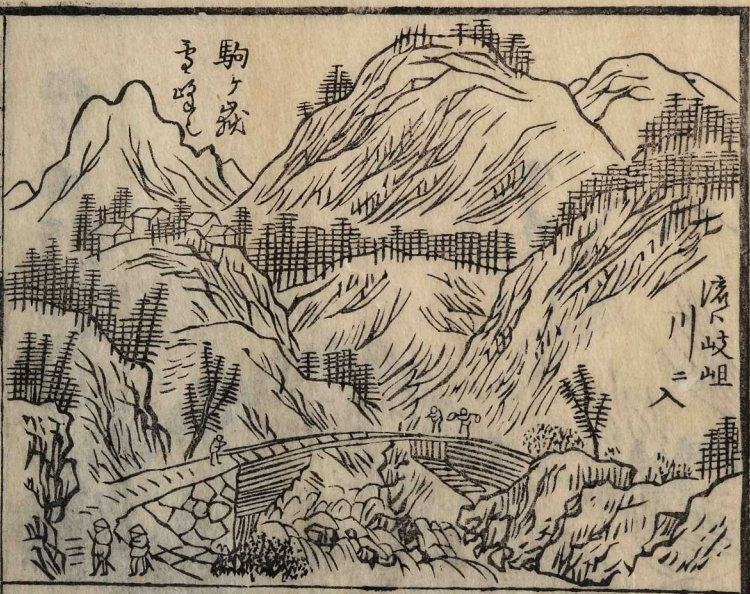


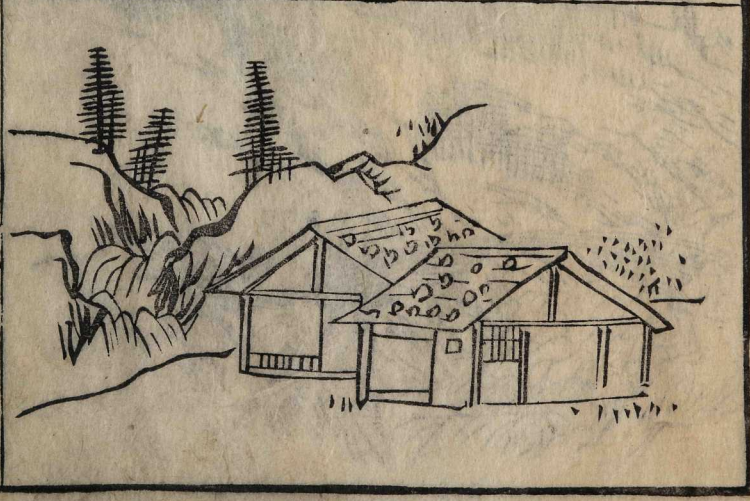
十解峠一里廿五町アリ
峠ニ馬籠(マゴメ)宿ヲ


ユナガダケ
胞衣ヶ嶽
雪ゝゝ白ー
此ゟ上雪
九月ナカバ
ニテモ
乗鞍岳
小ノ方飛騨嶽
加賀国ニ白嶽
又右ノ方駒ヶ岳
此ゟ雪峯ニ

ごふ峠　草木も月のみ山ぞかし　躑躅桜桃梨花時
ひるも　岐阻河流々機道　絶々不尽水乃声
よく人家板屋葺　架空板ろう　栂檜のやぶはら
八五原大雪良井の宿　鳥井峠ろう十八町のぼりも三十町ある
熱川ろう二里　本山ろうろ　岐阻路ろう下諏訪温泉
二所にも湖水是ナリの向ふ城ろう甲斐の山ろう見ろう
和田峠ろう五里のぼりも峠に茶店ろうろう四月
雪ろうろうれとぐろう七曲坂ろう

岐阻の人家


駒ヶ嶽
濃岐峠
川二入



雪峰
稻川橋 野尻須原の方
底ヘ吹嶋川ニ入

四月十日淺間山の不二ゟ四千餘丈ゟ此山焼出ゟ二里餘
焼石皆大石ゟ成色黒ク稍ク又七八丁ゟ焼砂稍ク
ほゟ坂本碓氷峠山ゟ皆焼石ゟ成木枯少ゟ此地
家ゟ松ゟ多ク枝繁ク又杤のまゟ上州妙義山
まで方ゟゟに山のゟゟ嶺ゟ多ク

一里餘まゟゟ
岩ゟよゟ二ツの穴ゟ
ゟ穴ゟつゟぬけゟゟ
ゟゟ百人ゟゟ大良射
ぬけゟの穴ゟゟ

妙義山岩峯
エカクコトアメゾ
画事ノ巧緻

十二日河合より熊谷宿まで堤(ドテ)を行(ユク)事二里餘左(サ)の方(カタ)に
樹(キ)ある右の方相州大山又富士山見ゆる四月十三日大
宮より板橋まで卅(ミソ)里(サト)神僊(シンセン)にうつる

寛政庚戌四月　　門人蘭江平民誌

江漢先生著

春波樓藏版目録

一銅版地毬全圖　并畧說一冊添　出来

一銅版東都八景　竪一尺余横一尺三寸余のながき国が彩うまで絵　出来

一銅版天毬之圖　并天文畧話一冊添　皆天地窮理ヲ譯ス　出来

一銅版地毬大全圖　分圖ニて合するときハ三尺の圖圖となる　并萬國風土考一冊添　近刻

一春波樓画譜　本版及銅版にて山水人物花鳥と圖を近刻

一和蘭奇工　銅版の彫方及すり方を細かに筆記画法もあかし天文の器ゆゑ和蘭奇器の製作と圖をもつて委しく書　近刻